〈論 文〉

ナイマン方言の音韻変化 The phonological transition of the Naiman dialect

ウ ムンゲンゲレル

(中国・赤峰学院大学外語教学部)

キーワード モンゴル語 ナイマン方言 音韻変化 隣接方言 方言区画

要旨

ナイマン方言は中国内モンゴル東部地域のモンゴル語諸方言の一つである。

本稿は方言話者に対する面接調査に基づく1次資料を収集・整理・分析し、モンゴル語ナイマン方言の近隣諸方言における位置付けを音韻変化の面から、近隣諸方言との比較研究を踏まえ、客観的に解明することを目的とした。

本稿の執筆にあたって用いた研究方法は、記述研究が中心である。また、モンゴル文語及び中国領内モンゴル語標準音との比較研究を中心にし、できる限りホルチン方言・バーリン方言・ハラチン方言など隣接方言とも比較して検討した。

そして、従来の方言区画論において、ナイマン方言をバーリン方言の一部、或はホルチン方言の一部としていた通説を再検討し、ナイマン方言はこれらの諸方言と同格の方言であるということを音韻変化の面から実証した。

ナイマン方言は、ホルチン方言とバーリン方言の中間的方言としての性格を持つ一方で、隣接の諸方言と異なり、隣接しないチャハル方言と共通する特徴ももっている。ナイマン方言は、たしかに中国領内のモンゴル語標準音及び隣接の諸方言との近似性が高い方言である。しかし、ナイマン方言固有の特徴もみられる。

ナイマン方言とチャハル方言の近似性の近さは、現在の地理的距離の遠近によるものではなく、歴史的な由来に起因すると考えられる。

abstract

The Naiman dialect is one of the Mongolian dialect of the eastern area of the Inner Mongolia in the People's Republic of China.

As the research method, this article centered on the description research method was used. This research concentrated on compare the Naiman dialect of the Modern Mongolian Language with Mongolian written language and standard accent. Meanwhile, comparison with other adjacent dialect such as the Horuchin dialect, the Baarin dialect and the Harachin dialect also has been concerned as much as possible to expand the range of the examination.

And, after reexamined past dialect division theory, able to proved the Naiman dialect is not a part of the Baarin dialect or the Horuchin dialect and is one of the major dialects of the Innermongolia as well as the Baarin dialect and the Horuchin dialect.

The Naiman dialect is an intermediate dialect of the Horuchin dialect and the Baarin dialect, and it differs from adjacent dialects the Horuchin dialect, the Baarin dialect, and the Harachin dialect of adjacent, and has a common feature with the Chahar dialect. the Naiman dialect is similar to standard accent and the various dialects of adjacent in respect of the phoneme, and the approximation (differ from the adjacent dialect) with the Chahar dialect is seen. On the other hand, a peculiar feature to the Naiman dialect is seen. It is thought that the neighborhood resemblance of the Naiman dialect and the Chahar dialect is not shown the geographic of present distance but originates in a historical origin.

0.1 はじめに

ナイマン旗のモンゴル人は、歴史的にはもともと現在のナイマン旗の所在地と異なり、チャハル（察哈尔¹）地域に居住していた。そのため、言語的にナイマン方言²にはチャハル方言の特徴もみられる。

筆者は、これまで現地調査の一次資料に基づき、モンゴル語ナイマン方言を具体的に記述し、隣接方言におけるナイマン方言の位置付けの再検討及びそれを実証することを試みてきた。本稿はその一部である。

0.2 研究目的と方法

本稿は現地調査に基づく1次資料を収集・整理・分析することにより、モンゴル語ナイマン方言の実態と近隣諸方言における位置づけを解明することを目的とした。すなわち、ナイマン方言はバーリン方言の一部、或はホルチン方言の一部ではなく、ナイマン方言はバーリン方言・ホルチン方言と同格の内モンゴルの諸方言の一つであることを実証することが本研究の主たる目的である。

研究方法としては、モンゴル語のナイマン方言をモンゴル文語及び標準音³との比較研究を中心にし、できる限りバーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言など隣接諸方言とも比較して検討する。

そして、従来の方言区画論において、ナイマン方言をバーリン方言の一部、或はホルチン方言の一部としていた通説を再検討する。

0.3 ナイマン旗とナイマン方言の概況

モンゴル語ナイマン方言は、中国内モンゴル自治区の東南部に位置するナイマン（奈曼）

旗のモンゴル口語を指す。

モンゴル国では首都のウラン・バートルで話されているハルハ方言が標準音となっている。中国領内では、中部方言（内モンゴル方言とも呼ばれている）を基礎方言として、中部方言の中の「ショローンフフ・ホショーに代表されるチャハル方言が標準語として選ばれている。ここで言う標準語とは主に音韻レベルでの違いを指すもので、・・・（フフバートル 1997：12）。中国領内のモンゴル語標準音（以下“標準音”と呼ぶ）は「標準音地域の音韻体系を基礎にすると同時に、モンゴル文語の音韻体系を規範とし、現代モンゴル語の普遍的な特徴を考慮する」という原則によって定められている（フフバートル 1997：13）。

ナイマン旗は約8100平方kmの面積を有する。それは東京都・埼玉県・神奈川県を合わせた面積に相当する。最新の統計（2000年末）によるとナイマン旗の総人口は42万8712人で、うち漢人は26万5841人であり、その62%を占める。モンゴル人は15万4385人であり、約36%となっている。

「北元時代に、ナイマン部族はチャハルの8つのオトグの一つだった。（略）16世紀の半ば頃、ナイマン部族はチャハル・トメンと共に（もともとの故郷であるチャハルの地域から⁴）東方に移動して、現在のナイマン旗が位置する地域にたどり着き、そこで南方へ移動していた内ハルハの人々と合流することとなった。このころからナイマン（旗のモンゴル人）の口語がバーリン方言の影響を受け始めた。清朝の時代、ナイマン旗がバーリン（巴林）・オーハン（敖汉）・オンニョード（翁牛特）（の各旗）などと一緒にジョーオダ盟に長く所属していたため、その口語が徐々にバーリン方言に属するようになると同時に、古来の特徴も残され、ジリム盟の他の旗・県と異なることとなった」（『奈曼旗志』2002：165）。

1636年、清朝がホショー（旗）、ジャサク（扎萨克）などの制度を定めた際には、ナイマン部族は50のソム（苏木）からなる「ナイマン旗」（ソムの上級行政単位）として編集された。

ナイマン旗は、その上級行政単位において様々な変遷が見られる。すなわち、1644年から長年ジョーオダ（昭乌达）盟に属していたが、満洲国（1932～1945年）時代には、1934－1943年は興安西省に、1943－1945年は興安総省に属していた。その後、1945年からはジリム（哲里木）盟に属していたが、現在は通遼市（哲里木盟は通遼市と名称変更）の一部となっている。このような所属する上級行政単位の変遷をはじめ、隣接するモンゴル語諸方言や漢語の様々な影響により、ナイマン方言はモンゴル語の諸方言の中でも独特で複雑な方言として発達してきた。すなわち、ナイマン方言は中国領内のモンゴル語標準音や隣接の諸方言に本来近似する方言であるが、音韻・文法・語彙の各分野で固有の特徴もみられる。また、ナイマン方言はバーリン（巴林）方言・ホルチン（科尔沁）方言・ハラチン（喀喇沁）方言と隣接しながら、隣接していないチャハル（察哈尔）方言とも共通点がみられる。

一方、隣接諸方言との相互干渉のほか、ナイマン旗の人口の3分の2を占める漢族の存在も無視できず、ナイマン方言に対する漢語の影響は大きい。ナイマン方言は現在のところ危機言語というほどの状況ではないが、将来の展望は決して楽観視できるものではない。教育と文化活動により活性化させる必要がある

0.4 従来の方言区画論におけるナイマン方言の位置付け

0.4.1. 一つの間方言と見なす方言区画論

モンゴル国の言語学研究者 *Sh. Luvsanvandan* (1959) は、中国領内のモンゴル語の方言を ① 中央方言 ② 西部方言 ③ 東部方言の大きく三つに区画しているが、さらに三つの中間方言があるとし、ナイマン方言を中央方言と東部方言の中間方言と位置づけている (*Mömö · Amuyulang* 1990 : 83)。

0.4.2 バーリン方言の一部とする方言区画論

1955～1956年に中国で実施された全国規模のモンゴル諸語とモンゴル語方言調査の後、中国領内のモンゴル語方言は、① バルガ・ブリヤート方言 ② 東部方言 ③ 中部方言 ④ 西部方言 ⑤ オイラト方言の五つの方言群に区画された (*Sudulqu tasuy* 1964 : 25)。ナイマン旗のモンゴル口語はその中の東部方言の下位のバーリン方言の一部とされた (*Sudulqu tasuy* 1964 : 45)。

1980年の3月に ① 内モンゴル方言 (中部方言) ② オイラト方言 (西部方言) ③ バルガ・ブリヤート方言 (東部方言) の三大方言群が設定された (*Tian siyoo* 2004 : 79-80)。このうち、内モンゴル方言 (中部方言) はさらに六つの下位方言に区画され、ナイマン旗のモンゴル語方言はその中のバーリン方言の一部とされた。

一方、内蒙古大学のチンゲルタイ教授は、中国における国内のモンゴル語方言を ① 内モンゴル方言 (中部方言) ② オイラト方言 (西部方言) ③ バルガ・ブリヤート方言 (東部方言) の三大方言群に区画し、内モンゴル方言 (中部方言) をさらに六つの下位方言に区画している。そして「これらの下位方言の中間に多くの過渡的方言がある。たとえば、バーリン方言の中のオーハン旗とナイマン旗の方言はバーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言の中間的な特徴を持っている。また、ナイマン旗のモンゴル語方言は西部地域の一部の方言の特徴をもっている」と述べている (*Čenggeltei* 1979)。

以上のほかにも、中国における国内のモンゴル語方言区画論は、ナイマン旗のモンゴル語方言をバーリン方言の一部としているものがほとんどであった。

0.4.3 ホルチン方言の一部とする方言区画論

Türgen (1978) は、ナイマン方言をホルチン方言の一部とした。その理由として、ナイマン旗はホルチン方言の中心地であるホルチン (科尔沁) 左翼中旗及びホルチン (科尔沁)

左翼後旗と同じ行政単位に属し、地理的にも近いことが考えられる。

0.5 中国におけるモンゴル語の方言研究

0.5.1 これまでの中国におけるモンゴル語の方言調査と研究史の概要

中国領内のモンゴル語方言研究は20世紀の50年代から始められたと言える。

1955～1956年に実施された全国規模のモンゴル諸語とモンゴル語諸方言の調査が中国におけるモンゴル語方言研究の第一歩となった。

これまでに、中国の各研究機関により各地で行われたモンゴル語方言調査及びその他の個人的な調査の結果により、モンゴル語方言に関する有益な資料が蓄積された。

上述の調査のうち、筆者が唯一の大学院生として携わったのが次の2回の調査である。それは、1993年と1994年の夏、内蒙古大学蒙古語研究所の数人の教員と大学院生（筆者）がジリム盟（現在の通遼市）とジョーオダ盟（現在の赤峰市）でそれぞれ行った現地調査である⁵。

中国におけるモンゴル語諸方言の社会言語学的研究は初期段階にあることが現状である。

中国におけるモンゴル語諸方言の言語地理学的な研究はまだ始まっていないといえる。内モンゴル大学のチンゲルタイ教授の「モンゴル研究に地図の方法を用いることについて」という論文（Čenggeltai 1985）はモンゴル語方言研究の理論上及び方法論上の新たな問題を提起した画期的で啓蒙的な論文であった。

0.5.2 ナイマン方言の先行研究

ナイマン方言の研究は1980年代から始まったが、筆者によるものを含め、ナイマン方言に関する先行研究として以下のようなものが挙げられる。

- ① Bolu (1984) : “Naiman qusiγun-u nutuγ-un ayalyu-yin abiyān-u qubiral-un tuqai angqan-u ajiylalta (ナイマン旗地方方言における音韻変化に関する第一報)”
- ② Qairqan (1988) : “Naiman aman ayalyun deki ergigülün qolboqu üge <dalai> (ナイマン方言の接続語 dalai について)”
- ③ Sangdügüreng・Čegen (1989) : “Naiman aman ayalyun-u abiyān-u sistEm (ナイマン方言の音韻体系)”
- ④ Öljeitoγtuqu (1991) : “Naiman aman ayalyun-u kedün geigülügci abiyān-u ondoosiqu asayudal-du (ナイマン方言における若干の子音の異化について)”
- ⑤ Sečen (1995) : “Naiman qusiγun-u yariyan-u kele-yi dürimjigülkü-dü qolboydaqu abiyān-u asayudal (ナイマン旗の口語の標準音化に関わる音韻の問題)”
- ⑥ Caiyun (1995) : “Naiman aman ayalyun-u abiyalaburi-yin sistEm-ün ončaliγ (ナイマン方言の音韻体系の特徴)”

- ⑦ Mǒnggüngerel (1996) : “Naiman aman ayalγun-u abiyan-u qubiral (ナイマン方言の音韻変化)”
- ⑧ Mǒnggüngerel (1998) : *Naiman aman ayalγu* (ナイマン方言)
- ⑨ ムングングレル (2001) : 「モンゴル語ナイマン方言の口語資料」
- ⑩ Jouo Hakutarou (城生 佰太郎)・Mǒnggüngerel (2004) : “Naiman aman ayalγun-u egesig-ün ĵadalulta — dayun-u uqayan-u ĵadalulta-bar γool bolγaysan (ナイマン方言における母音の分析 — 音響音声学的解析を中心に—)”
- ⑪ ムングングレル (2005) : 「モンゴル語ナイマン方言における格の用法」
- ⑫ ムングングレル (2006) : 「モンゴル語ナイマン方言の形態・語彙的特徴」
- ⑬ Sečen (2000) : “Bayarin aru qorčın naiman-u abiyan-u qaričayulul (バーリン・アルホルチン・ナイマンの音韻の比較)”
- ⑭ Mǒnggüngerel (2013) : “Öbör mongγol-un ĵegün oron-u mongγol kelen-ü aman ayalγu nuγud-un töröl sadun-u dayudaly_a-yin tuqai — naiman aman ayalγu-bar γool bolγaba (内モンゴル東部地域のモンゴル語諸方言における新属語彙について — ナイマン方言を中心に—)”
- ⑮ Mǒnggüngerel (2013) : “Nasun-u ĵüriy_e-tai qolbuγdaysan naiman aman ayalγun-u abiyan-u qubiral-i sinĵilekü-ni (年代層別の差異に関連するナイマン方言の音韻変化について)”

ナイマン方言の研究は研究史的には前期と後期の2段階に分けられる。

前期は1980年代～1990年代半ば頃までで、方法論的には、ナイマン旗出身のモンゴル人のネイティブの研究者の内省によるものが多い。内容的にはほとんど音韻に関する記述研究であった。先行研究の①～⑥まで(②を除く)はこれに当る。なお、②は文法に関するものである。

後期は90年代半ば頃以降の研究で、方法論的には現地調査による録音及び画像の記録とそれをデータベース化したものを基礎資料にしているものが多い。世代別動態分析と音韻以外にも形態や語彙に亘る広範囲の分析及び音響音声学の方法も試みられている。上に挙げた先行研究の⑦～⑮(⑬を除き)はこれに当る。なお⑦⑧は現地調査によるものであるが、データベース化はなされておらず、画像資料もない。⑨⑩⑪はデータベース化した現地調査の資料に基づいたものである。⑩⑮の調査の全過程においてインフォーマントの発音の様子を全てビデオ録画し、画像として収録し、記録を残した。⑧はナイマン方言の音韻・文法・語彙を初めて体系的に記述したものである。⑮はナイマン方言の音韻の動態分析を行ったものである。⑬は年代的には後期に入るが、ナイマン旗のモンゴル口語をバーリン方言の三つの下位方言の一つと見なし、方法論的にはアルホルチン方言のネイティブの研究者の内省による記述及び文献資料に基づくものである。

0.6 資料とインフォーマント

本稿執筆にあたって用いる基礎資料は、筆者自身が1999年及び2000年に行った2回の現地調査の資料をデータベース化したものである。すなわち、1999年8月、ナイマン旗のバヤン・タラ⁶・ソムのドウルブン・オボー（“四つの礎”）ガチャーでチョイジホルロー氏が語った物語、同じくトメンウルジ氏の談話、バガ・ベルヘ⁷・ソムのドルジニンブ氏の談話、さらに、2000年10月にナイマン旗のラジオ放送局でバヤン・タラ・ソムのジューン・ウフルイン・タラーのデーボウ氏が語った物語をそれぞれ録音し、全部で3339⁸文をデータベース化したものである⁹。本稿で使用した符号はデータベースの符号と同じである。符号の説明は凡例を参照されたい。

調査方法としては、ナイマン方言の音韻・形態・語彙などを総合的に研究するための資料収集を目的とし、口承文芸などを自然に話してもらったというものだった。

表1：インフォーマントの一覧

インフォーマント	生年	性別	職業	就学期間	談話資料の文の番号
チョイジホルロー氏	1938	男性	牧民	4年	0001～1967
トメンウルジ氏	1946	男性	牧民	6年	1968～2529
ドルジニンブ氏	1944	男性	牧民	5年	2530～2728
デーボウ氏	1969	男性	牧民	高卒（12年）	2729～3339

これらの調査のほかに、2004年の8月にバガ・ベルヘ・ソムのイヘ・ジゲスタイ村で現地調査を行った¹⁰。

本稿では以上の現地調査の資料のほかに、内蒙古大学蒙古語研究所のモンゴル語方言地図作成のための調査（1993年と1994年の夏各2ヶ月間）の資料¹¹も参考した。

ナイマン旗のバヤン・タラ・ソムとバガ・ベルヘ・ソムを調査対象地域として選定した理由は以下の通りである。

まず、バガ・ベルヘ・ソムは砂漠があり交通が不便で、公共交通手段として1999年夏から通っているバスも強風が吹き荒れる春の季節には不通になることがある。また、バヤン・タラ・ソムの調査地では（1999年と2000年当時）未だにバスが通じてさえいない。このため、これらの地区は他の言語（具体的には漢語）や隣接方言の影響を最も受けることが少ないと考えられる。

調査地域はナイマン旗の中で、ナイマン方言の代表的な使用地域であると言える。「ナイマン旗の西北部と北部では、民俗・習慣・伝統や方言の各方面で純粋なナイマン旗（のモンゴル文化）の固有の特徴が最も強い。南部はハラチン方言の影響を受けて、東部はホルチン方言の影響を受けている」（『奈曼旗志』2002：165）¹²。

そのため、本稿の基礎資料の調査対象地域の選定が適切であることは『奈曼旗志』のこの記述からも分かる。

凡 例

本稿に使用した各種記号は以下のように用いた。

各種記号：(- , () ^)

ハイフン (-)

(1) 格語尾・複数語尾・人称所属助辞・再帰所属語尾と語幹の間の表示。

例： uxər-i:n tʃə:ɖʒən-d oʃo:-gi: obgən-ε: ni:rs-ə:r ma:dε:n-dtər
xu:-gu:d jɛma:-d jaŋ,guar-tʃud
nɔxɔ:-gi:-mən gər-t-tʃəⁿ ɖʒʊ[^]s-n
urx-a:n gər-tn gər-tə:(-n) xun-ε:-xə-d

(2) 強調の助辞 /l/ /tʃ/ の前。

例： idɖʒi-l-ε:ɖʒ gərɖʒi-l usərɖʒ ɔɔɔ:d-l-ε: durləx-tʃ

(3) 文語の「形動詞語尾 -γsan/-gsen と -qu/-kü + 断定助辞 jim」は、ナイマン方言では縮約され /-səm/ /-xəm/ となる。この場合の助辞 /m/ の前。

例： urstʃxə-m irsə-m

(4) 疑問助辞 /i:/、(j)、u:/、ʊ:/、(ε:/) / の前。

例： ni:rs-ə:r xən muŋ səln-ʊ: ?

(5) 呼びかけの助辞の前。

例： mo:m-o: arəgt-a:

つなぎ記号 (,)

(1) 複数の音節からなる漢語語彙の漢字と漢字のつなぎ。

例： maŋ,maŋ,di jaŋ,guar-tʃud

(2) 概称の構成部分 (Mönggüngerel 1998 : 65-68 参照) のつなぎ。

例： ʃɛrəx,mərʔən-d

(3) 同じ言葉による畳語のつなぎ。

例： ɛm,ɛm-a:r-a:n odər,odər

(4) 一部の定型的表現に含まれる要素のつなぎ。

例： ʊ[^]rsx-a:s,ər... ugə:lε:

丸かっこ (())

音が変化している場合の元の音を () の中に記す。

例: arəgt obgəŋ(n) gəɔ̯

また、音韻または音節が脱落した場合は、ハイフンを付けて (-) のように表す。

例: xun-ɛ: xəlʔ-ə:r(-bɔ̯)lɔ:l

なお、次のような規則的な縮約の場合は括弧を付けない。

a. 属格語尾の末尾の /n/ の脱落

属格形のあとに再帰所属語尾及び人称所属助辞が後続する場合、属格語尾の末尾の /n/ は規則的に脱落する。

例: ni:rs-i:(-n)-tʃin o:s-i:(-n)-xə:n a:b-i:(-n)-xa:n のように表記しないで、
ni:rs-i:-tʃin o:s-i:-x-ə:n a:b-i:-xa:n と表記する。

b. 疊語の前の語の末尾の音の脱落

例: xœ:(-n),xœ:n-ɔ:s-ɔ:(-n) のように表記しないで、xœ:xœ:n-ɔ:s-ɔ:(-n) と表記する。

c. その他

語頭の /x t tʃ/ がその後の子音の影響で /g d ɔ̯/ と規則的に有声化する。したがって、この場合にも元の音は示さない。

例: g(x)uʃir d(t)ɔsɔ:d ɔ̯(tʃ)ix のように表記しないで、guʃir dɔsɔ:d ɔ̯ix と表記する。

右肩小文字 (^)

/u^/ は第 1 音節の /u/ の異音を示す。具体的には「3.1.1.1」で後述する。

例: gu^rbən ɔ̯jil-i:n

プラス記号 (+)

漢語からの借用語のあとに付ける。

例: la:,ja:+ sar

右肩のアステリスク (*)

子音で終る語末 (文末の場合が多い)、当該語の意味を強調する部分 (a:₅) の前に付ける。

例: u(-g)lə: ɔ̯rt*a:

本論 標準音及び他の方言との音対応

1.1 音韻の対応

1.1.1 語頭子音の交替

ナイマン方言では標準音の語頭の x t $tʃ$ はその後に来る子音の影響で g d $ɟ$ に異化することがある。この点でナイマン方言は隣接のホルチン方言・ハラチン方言・バーリン方言とは区別され、地理的に隣接していないチャハル方言 (Sečen 1998 : 138) やオルドス方言 (Sečen・Bayatur・Sengge 2002 : 96 ; 98) などの内モンゴルの中部・西部の方言と同じである。

(1) 異化の条件

ナイマン方言では、標準音の x t $tʃ$ で始まる語頭の「子音+母音」の構成に子音 x t $tʃ$ s $ʃ$ が直接後続するまたは m n $ŋ$ 以外の子音が挿入されると、語頭の x t $tʃ$ が g d $ɟ$ に異化する。この異化は条件付きの異化である。

これらの子音の中で、 t $tʃ$ の d $ɟ$ への異化は無声音の有声音への変化であり、 x の g への異化は摩擦音の破裂音への変化である。

表 2 : $x > g$ の異化の例

文語 ¹³	標準音 ¹⁴	ナイマン方言	意味
ᠬᠡᠰᠡᠭ	keseg	$xəʂəg$ $gəʂəg$ u(04)0682 ¹⁵	塊
ᠬᠡᠰᠢᠭ	kesig	$xəʃig$ $gəʃig$ / $gəʃəg$ u(09)2250 / u(09)2264	恩恵
ᠬᠢᠴᠢᠶᠡᠯ	kičiyel	$xəʃə:l$ $gəʃə:l$ u(02)0340	授業
ᠬᠡᠪᠲᠡᠭᠡᠳ	kebtged	$xəbtə:d$ $gəbtə:d$ u(08)1654	寝て
ᠬᠠᠲᠠᠶᠤ	qatayu	$xatu:$ $gatu:$ / $gatu:$ u(10)2586 / u(11)3306	硬い
ᠬᠠᠪᠴᠢᠶᠠᠳ	qabčiyad	$xabtʃa:d$ $gabtʃa:d$ u(06)0937	挟んで

表 3 : $t > d$ の異化の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠲᠤᠰᠤ	tosu	$tɔs$ $ɟɔs$ u(09)2068	油
ᠲᠠᠰᠢᠶᠤᠷ	tasiyur	$tʃʊ:r$ $ɟʃʊ:r$ u(04)0548	鞭
ᠲᠤᠭᠲᠤᠯ	toytayal	$tɔgtɔ:l$ $ɟɔgtɔ:l$ u(09)2110	規定
ᠲᠠᠲᠠᠶᠠᠳ	tatayad	$tata:d$ $ɟata:d$ u(10)2717	引いて

表 4 : tʃ > dʒ 異化の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠴᠢᠰᠤ	čisu	tʃʊs	dʒʊs / dʒʊʌs u(09)2158/ u(01)0047	血
ᠴᠠᠪᠴᠢᠬᠤ	čabčiqu	tʃæbtʃix	dʒæbtʃix u(01)0253	刈る
ᠴᠠᠴᠤ	čaču-	tʃatʃi-	dʒætʃi- u(10)2674	撒き散らす

(2) 異化しない条件

上記のような異化の条件のある子音の間に長母音または第1音節末に m n ŋ がある場合は語頭の x t tʃ は g d dʒ に異化しない。なお、上記の長母音とはナイマン方言では長母音で発音されるが、文語では二重母音の場合もある。すなわち、ナイマン方言では長母音として現れる母音のことである。

表 5 : 長母音が挟まれた例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠲᠣᠶᠣᠰᠠ	toγosq_a	tʊ:sɔg	tʊ:səg u(05)0786	煉瓦
ᠬᠡᠢᠬᠡᠳ	keiked	xu:xəd	xu:xəd u(06)0881	子供
ᠴᠠᠶᠠᠰᠤ	čayasu	tʃa:s	tʃa:s u(09)2277	紙

表 6 : m n ŋ が挟まれた例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠴᠠᠩᠰᠢ	qangsi	xanʃ	xanʃ — ¹⁶	値段
ᠴᠠᠨᠴᠠᠢ	qančui	xantʃi:	xentʃi: —	袖
ᠲᠠᠮᠰᠢᠶᠠᠯᠠᠬᠤ	tamsiyalaqu	tamʃa:lax	tamʃa:ləx —	舌打ちをする
ᠲᠠᠮᠲᠡᠴᠡᠭᠡᠨ	tamečegen	təmtʃə:n	təmtʃə:n u(11)3183	争い
ᠴᠠᠮᠴᠠ	čamča	tʃamʃ	tʃəmʃ —	薄いコート

ナイマン方言の語頭の x t tʃ が g d dʒ に異化する変化は語幹だけに発生し、派生語には発生しない。

異化する条件に適合する子音が一つの語にあっても、その一つの語の二つの子音が異なった形態素から構成される場合には、語頭の x t tʃ は g d dʒ に異化しない。

表7：派生語との比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠲᠠᠬᠢᠴᠤ	takiqu	tæxɪx	dɛxəx u(09)2222	祭る
ᠲᠠᠰᠢᠶᠦᠷ	tasiyur	tɒʃu:r	dɛʃu:r u(04)0548	鞭
ᠲᠤᠯᠠᠬᠤᠭᠡᠢ	tulqu ügei	tulax gue	tulxuə u(07)1216	至らない

標準音の tæxɪx は文語では「taki + qu」の構成で、標準音では「tæx + x」の構成である。語幹が tæx であるため、ナイマン方言で語頭の t が異化し、d となる。

標準音の tɒʃu:r は語幹と語尾に分けられない。すなわち、一つの形態素から構成されているため、ナイマン方言で語頭の子音 t が異化し、d となる。

標準音の tulax は文語では「tul + qu」の構成で、標準音では「tul + x」の構成で、語幹と語尾に分けられる。すなわち、二つの形態素から構成されているため、ナイマン方言で語頭の子音 t が d と異化しない。

語頭の子音 x t ʃ の g d ɟ への異化或は互いに交替して使われる例はモンゴル諸語にもみられる。

表8：モンゴル諸語にみられる t と d の交替の例

文語	ダグル語	東部ユグル語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠲᠠᠬᠢᠶᠠ	takiy_a	danga	daxGa	tæxia	dɛxa: u(06)0916	鶏

しかし、モンゴル諸語にみられるこれらの子音の交替は第1音節に限らず、第2音節以降にもみられる。

異化の特徴をまとめると次のようになる。

- ① x t ʃ で始まる語頭の音節に子音 x t ʃ s ʃ が直接後続したり、或いは m n ŋ 以外の子音が挿入されたりすると、語頭の x t ʃ が g d ɟ に異化する。
- ② 上の条件で、第1音節に長母音があるまたは第1音節末に m n ŋ がある場合、語頭の x t ʃ は g d ɟ に異化しない。
- ③ この変化は語幹のみに発生する逆行異化であり、派生語には発生しない。

1.1.2 場所によらない交替

1.1.2.1 子音の対応

ナイマン方言では、① n-ŋ の対応 ② b-m の対応 ③ m-ŋ の対応 ④ n-m の対応 ⑤ n-l の対応 ⑥ g-r の対応 ⑦ ʃ-j の対応 ⑧ ɟ-j の対応 ⑨ r-l の対応 ⑩ ʃ-j の対応 ⑪ x-j の対応の 11 の対応があるが、以下ではこれらを順に見ていく。

① n-ŋ の対応

ナイマン方言では、バーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言などの隣接諸方言と同様に文語と標準音の一部の語末の n が ŋ で発音される。チャハル方言・オラド方言などでは標準音の語末の n が全て ŋ で発音される。この点ではナイマン方言は、チャハル方言・オラド方言など内モンゴル中部・西部の諸方言と区別され、文語により近い。

表 9 : 語末の n-ŋ の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠶᠦᠷᠪᠠᠯᠵᠢᠨ	γurbaljin	gurbaldʒin	gurbəldʒəŋ —	三角
ᠬᠥᠨᠳᠡᠯᠢᠨ	köndelen	xondlən	xondləŋ u(04)0547	横
ᠳᠣᠷᠪᠡᠯᠵᠢᠨ	dörbeljin	dorbəldʒin	durbəldʒəŋ u(09)2404	四角
ᠮᠠᠨᠠᠨ	manan	manan	manəŋ —	霧
ᠭᠦᠷᠡᠯᠳᠦᠭᠡᠨ	güreljegen_e	gurə:ldʒgən	gurə:ldʒəŋ —	こおろぎ

ナイマン方言では、以上のように標準音の少数の語末の n が ŋ で発音される語を除き、ほとんど n で発音される。

ナイマン方言には、標準音の少数の語中の n も ŋ と発音される。

表 10 : 語中の n-ŋ の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠰᠣᠨᠤᠰᠤᠴᠤ	sonosqu	sɔnsɔx	sɔŋsəx u(04)0603	聞く

この現象はホルチン方言・ハラチン方言 (Sečen 1998 : 363) にもみられる。

② b-m の対応

ナイマン方言では、標準音の少数の語中の b が m で発音される。

表 11 : 語中の b-m の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠣᠪᠣᠭ	oboy	ɔbɔg	ɔmɔg u(05)0731	名字
ᠨᠢᠯᠪᠤᠰᠤ	nilbusu	nulmas	nəlməs —	涙
ᠮᠠᠻᠠᠪᠣᠳ	maqabod	maxbɔd	max mɔd —	体質
ᠶᠠᠷᠪᠠᠬ	qarbuqu	xarbox	xarməx u(01)0014	射る

b と **m** の対応の例はモンゴル語の他の方言及びモンゴル諸語にもみられる。

モンゴル語の一部の方言に ᠰᠢᠯᠪᠢ silbi (足首; パイプ煙管の吸い口) ᠠᠷᠪᠤᠭᠤ qarbuqu (射る) の **b** は **m** で発音される。**m-ŋ** の対応の例は調査資料 (1993 年 1994 年) ¹⁷ によると次のようである。

表 12 : 他の方言における **b-m** の対応の例

調査地 調査語		ホルチ ン左翼 後旗	ホルチ ン左翼 中旗	アルホ ルチ ン旗	ナイ マン 旗	ヘシ グテ ン旗	オンニ オード 旗	バー リン 左旗	バー リン 右旗	ハラ チン 旗
		ᠰᠢᠯᠪᠢ silbi	23 ¹⁸	28	8	0	0	0	0	0
ᠠᠷᠪᠤᠭᠤ qarbuqu	全て	全て	2	全て	0	0	9	0	6	

b-m の対応はモンゴル諸語及び諸方言の語中だけではなく、語頭と語末にも現れる。

ヘシグテン方言とバーリン方言はチャハル方言と地理的に近いこともあり、**b-m** の対応に関して文語及び標準音に近く、ナイマン方言・ホルチン方言などと異なる。

モンゴル諸語にも **b-m** の対応の例がみられる。

表 13 : モンゴル諸語における **b-m** の対応の例

文語	標準音	東部ユグル語	意味
ᠪᠤᠯᠪᠠᠷᠠᠢ bulbarai	<u>b</u> ulabræ:	<u>m</u> əɮβəri:	幼い

③ m-ŋ の対応

ナイマン方言では、標準音の少数の語中の **m** が **ŋ** で発音される。

表 14 : **m-ŋ** の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠨᠢᠮᠭᠡᠯᠡᠭᠡᠳ nimgeleged	<u>n</u> imgələ:d	<u>ŋ</u> lələ:d u(09)2151	薄くして
ᠡᠮᠬᠦᠬᠦ emküü	<u>u</u> mχəx	<u>uŋ</u> ŋəx / uŋəx —	(口に) 含む

④ n-m の対応

ナイマン方言では標準音の少数の語中の **n** が **m** で発音される。

表 15 : n-m の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠶᠢᠷᠲᠢᠨᠴᠢᠨᠠ yirtinčü	yortonʃ	ertəmʃ u(08)1351	世の中
ᠶᠣᠶᠢᠷᠠᠨᠴᠢ ᠶoiranči	guiranʃ	gujirəmʃ —	乞食

このような対応は他の方言にもみられる。ᠶᠢᠷᠲᠢᠨᠴᠢᠨᠠ yirtinčü（世の中）の n を m で発音する例は調査資料（1993 年と 1994 年）によると次のようである。

表 16 : n-m の対応の各方言の例

調査地 調査語	ホルチ ン左翼 後旗	ホルチ ン左翼 中旗	ジャロ ード旗	アルホ ルチン 旗	フレ ー 旗	ナイ マン 旗 ¹⁹	バーリ ン左旗	バーリ ン右旗	ハラチ ン旗
ᠶᠢᠷᠲᠢᠨᠴᠢᠨᠠ yirtinčü	23	29	14	12	全て	6	8	11	5

上の例とは反対に、ナイマン方言では文語の少数の語中と語末の m を n で発音する場合もある。他の方言及び標準音にも文語とこのように対応する例がみられる。

表 17 : m - n の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠤᠮᠳᠠᠶᠠᠰᠤ umdayas-	unda:s-	unda:s- u(02)0375	喉が渴く
ᠳᠤᠮᠳᠠ dumda	dund	dund u(04)0567	中部
ᠶᠠᠶᠤᠮᠤ ᠠ ᠬᠡᠭᠤᠮᠤ yayum_a keüm_e	jum xum	jim xun u(09)2228	もの

⑤ n-l の対応

ナイマン方言では標準音の一連の語頭の n が l で発音される。

表 18 : 語頭の n - l の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠨᠤᠰᠢᠷᠢ (nüsər)	nüsər	læsər	重い
ᠨᠠᠪᠴᠢ (nabči)	nabčj	lɛbčj	葉
ᠨᠠᠮᠠᠭᠠ (namay_a)	ŋama:	lama:	たくさんの葉 ; 柔らかい枝
ᠨᠠᠭᠤᠰᠤ (nuuq_a)	nʊ:x	lʊ:x	目やに
ᠨᠣᠭᠲᠤ (noyту)	nɔgt	lɔgt	おもがい
ᠨᠡᠪᠲᠡ (nebte)	nəbt	ləbt / lu:d	貫通
ᠨᠡᠪᠴᠢᠬᠢ (nebčikü)	nəbčjix	ləbčjix	滲む ; 浸透する

同様に、文語のᠨᠠᠪᠲᠠᠢᠬᠤ nabtaiqu (垂れ下がる) や ᠨᠡᠪᠲᠡᠷᠡᠬᠢ nebertekü (透る) などの語頭の子音が標準音では n で、ナイマン方言では l である。すなわち、ナイマン方言では labti:x læbtərɛx のように発音される。このような語頭の n が l で発音される現象はバーリン方言 (Sečen 1998 : 276) ・ホルチン方言 (Bayančoytu 2002 : 80) ・ハラチン方言 (Sečen 1998 : 363) にもみられる。

語頭の n が l で発音される現象はナイマン方言とその隣接方言にみられるが、チャハル方言など内モンゴルの中部及び西部の方言にはみられない。

モンゴル諸語にも n-l の対応の例がみられる。

表 19 : モンゴル諸語における n-l の対応の例(1)

文語	標準音	バオアン語	意味
ᠴᠢᠩᠨᠠᠬᠤ (čingnaqu)	ʧaŋnax	ɬaŋlegu	静かに聞く ; 盗み聞きする
ᠳᠠᠮᠨᠠᠬᠤ (damnaqu)	damnax	dabləgu	担う
ᠨᠣᠭᠲᠤ (noyту)	nɔgt	lɔxta	おもがい

表 20 : モンゴル諸語における n - l の対応の例(2)

文語	標準音	東部ユグル語	意味
ᠨᠠᠪᠴᠢ (nabči)	nabčj	labčjaG	葉

表 21 : モンゴル諸語における n - l の対応の例(3)

文語	標準音	ダグル語	意味
ᠨᠣᠮ (nom)	nɔm	lom	本 ; お経
ᠨᠠᠮᠠᠭᠠ (namay_a)	ŋama:	lawa:	たくさんの葉 ; 柔らかい枝
ᠨᠠᠪᠴᠢ (nabči)	nabčj	lartčj	葉

n-lの対応の例はナイマン方言では語頭だけでなく、語中にもみられる。

標準音の m に後続する語中の n がナイマン方言では l で発音される。これは、鼻音 m の影響で後続する鼻音 n が異化したためである。

表 22：語中の n-l の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠳᠠᠮᠨᠠᠬᠤ	damnaqu	damnax	damləx u(11)2825	担う
ᠳᠣᠮᠨᠠᠬᠤ	domnoqu	dōmnax	dōmləx —	呪う
ᠰᠠᠮᠨᠠᠬᠤ	samnaqu	samnax	samləx —	櫛をかける
ᠪᠠᠷᠳᠠᠮᠨᠠᠬᠤ	bardamnaqu	bardamnax	bardəmləx —	驕り高ぶる

ナイマン方言では、上の例とは逆に、標準音の l が n で発音される例もみられる。例えば、文語の ᠯᠠᠳᠠᠬᠤ laidaqu (浚う) が標準音では læ:dax であり、ナイマン方言では nɛ:dəx である。

l-n の対応の例はモンゴル諸語にもみられる。

表 23：モンゴル諸語における l-n の対応の例(1)

文語	標準音	バオアン語	意味	
ᠮᠡᠯᠡᠬᠡᠢ	melekei	məlxɪ:	məngɪ:	蛙
ᠬᠠᠯᠲᠤᠷᠢ	qalturi-	xaltar-	xandər	滑る

表 24：モンゴル諸語における l-n の対応の例(2)

文語	標準音	ダグル語	意味	
ᠮᠢᠯᠠᠭᠠ	milay_a	mɪlɑ:	minɑ:	馬の鞭
ᠣᠯᠤᠰᠤ	ölus-	ols-	xuns-	腹がへる
ᠨᠢᠯᠪᠤᠰᠤ	nilbusu	nulmas	nonbus	涙

以上のほかに、ナイマン方言では ədʒin [ᠠᠵᠢᠯᠢ] (仕事) のように、文語の少数の語末の l が n で発音される。

⑥ g-r の対応

ナイマン方言では文語と標準音の少数の語末の g が r で発音される。例えば、文語の ᠴᠤᠭᠠᠶᠢ čuqay (珍しい、稀) は標準音では tʃuxag であるが、ナイマン方言では dʒuxə(u)r²⁰である。標準音の tʃuxag の語末の g が r で発音されることはホルチン方言・ハラチン方言にも同様

にみられる (1993 年と 1994 年の調査)。文語と比較すると実は $g > r$ と $r > g$ の対応の例は少数であるが、標準音にもみられる。例えば、 $\text{čečeg} + \text{lig} > \text{tʃətʃərliɡ}$ $\text{örlöge} > \text{oglo:}$ のようである。そのため、文語と比較すると、 $g > r$ と $r > g$ の対応は現代モンゴル語の諸方言及び標準音にもみられる。

⑦ tʃ-j の対応

ナイマン方言では、標準音の少数の語の tʃ が j で発音される。

表 25 : tʃ-j の対応の例

文語		標準音	ナイマン方言	意味
ᠴᠡᠷ	čer	tʃər	ʃir	痰
ᠴᠢᠳᠠᠯ	čidal	tʃɪdal	ʃɛdəl	力
ᠨᠢᠴᠠ	niča	nɪtʃ	neʃ	砕ける

チャハル方言・バーリン方言 (Sečen1998 : 275)・ハラチン方言 (Sečen 1998 : 363) でも少数の語の tʃ が j で発音されている。ホルチン方言では標準音の tʃ が全て j で発音される。

⑧ ɟ-j の対応

ナイマン方言では、標準音の少数の語の ɟ が j で発音される。このような対応はモンゴル諸語にもみられる。

表 26 : ɟ-j の対応の例

文語		標準音	ナイマン方言	意味
ᠵᠠᠨᠴᠢᠬᠤ	jančiqu	ɟæntʃix	ʃentʃəx u(08)1896	殴る、叩く
ᠡᠵᠢ	eji	ə:ɟ	ə:j u(09)2093	母

表 27 : モンゴル諸語における ɟ-j の対応の例

文語		標準音	バオアン語	意味
ᠵᠠᠨᠴᠢ	janči-	ɟæntʃ-	ʃant*-i-	殴る、叩く
ᠵᠠᠷᠢᠮ	jarim	ɟærim	ʃarəm	一部

⑨ r-l の対応

ナイマン方言では、少数の語において文語及び標準音と比較して r と l の対応の例がみられる。例えば、文語の tūrḱikü (塗る) は標準音では turxəx であるが、ナイマン

方言では *duɮxəx* ($t > d$ の異化) である。

l - r の対応の例：限界の副動詞語尾は標準音では *-tal₄²¹* であるが、ナイマン方言では *-tər* である。l が r で発音される点でナイマン方言はチャハル方言と同様である。

例 1 : u(09)2262 *gər-tə:n ɔrdʒ irtər gurəb uda: asu:n* . (家に入って来るまで 3 回聞く。)

例 2 : u(09)2435 *ən burgo: gər-tʃəⁿ ɔdɔ: mən tɛbəⁿ xədn ɔn bɔltər bɛ:dʒ ju: .*
(*burgo: gər²²* は 50 年代まで であった。)

⑩ ʃ-j の対応

ナイマン方言では、標準音の少数の語頭の ʃ が j で発音される。

表 28 : ʃ-j の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠰᠢᠲᠠᠬᠤ <i>sitaqu</i>	ʃɪtax	jɛtəx	燃える
ᠰᠢᠯᠵᠠᠷᠠᠬᠤ <i>siljaraqu</i>	ʃɪɮʒrax	jɛɮʒirəx	柔らかくなるまで煮える

チャハル方言にもこのような現象がある (norjin 2001 : 122 ; Sečen 1998 : 140)。また、文語の ᠰᠢᠲᠠᠬᠤ *sitaqu* ᠰᠢᠯᠵᠠᠷᠠᠬᠤ *siljaraqu* ᠰᠢᠷᠻᠡᠭ *sirkeg* (繊維) ᠰᠢᠴᠠᠭᠤ *siqayu* (狭い) ᠰᠢᠪᠴᠠᠷᠠᠬᠤ *sibqarqu* (湿り気がなくなる) ᠰᠢᠲᠦᠭᠡᠨ *sitügen* (崇拜物、トーテム) の語頭子音が標準音では ʃ で、ウジウムチン方言 (チャハル方言の隣接方言) では j で発音される (Kükebars・Čimeg 1997 : 42)。

⑪ x-ʃ の対応

ナイマン方言では標準音の一部の語頭の x (文語の i の前の k) が ʃ で発音される。この点でナイマン方言はバーリン方言・ホルチン方言と異なり、ハラチン方言と共通している。

表 29 : x-ʃ の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠬᠢᠷᠠᠭᠤ <i>kirayu</i>	xɪru:	ʃɛru: ——	霜
ᠬᠢᠷᠦᠭᠡ <i>kirüge</i>	xoro:	ʃyro: ——	鋸
ᠬᠢᠵᠠᠶᠠᠯᠠᠩ <i>kijayalang</i>	xɪdʒa:lɔŋ	ʃɪdʒa:lɔŋ u(09)2332	4 歳の牛と馬、3 歳の山羊と羊
ᠬᠢᠮᠤᠷᠠᠭᠠ <i>kimuray_a</i>	xɪmra:	ʃɛmra: ——	風邪
ᠬᠢᠷᠢ <i>kiri</i>	xir	ʃir ——	能力、程度
ᠬᠢᠷᠦᠭᠤ <i>kiryui</i>	xɪryui	ʃɛrgu: ——	ハイ鷹

語頭の *x-ʃ* の対応の例はハラチン方言に比較的多くみられる。例えば、ハラチン方言の多くの調査地点では標準音の *xu:rs* (風の卵) (文語では ᠬᠢᠢᠷᠰᠤ *kiyursu*) が *ʃu:rəs* / *ʃɛ:rəs* / *ʃi:rəs* のように発音される (1994 年の調査資料)。また、標準音の *xuitən* (寒い ; 冷たい) (文語では ᠬᠢᠢᠲᠦᠨ *küiten*) が寧城県のハラチン方言では *ʃy:tən* / *ʃi:tən* と発音されている (1994 年の調査資料)。

このほかにナイマン方言では、標準音の一部の語中の *tʃ* / *ɟ* が *t* / *d* で発音される。

表 30 : 語中の *tʃ-t* と *ɟ-d* の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠪᠤᠴᠠᠯᠠᠬᠤ buçalqu	bʊtʃlax	bætlæx u(01)0043	沸く
ᠠᠨᠵᠢᠰᠤ anjisu	andʒis	ændəs u(10)2672	犁

1.1.2.2 母音の対応

(1) 円唇母音と非円唇母音の対応

円唇母音と非円唇母音の対応については (a) 円唇母音から非円唇母音への対応 (b) 非円唇母音から円唇母音への対応 (c) 円唇母音同士の対応の三つに分けて述べる。

(a) 円唇母音から非円唇母音への対応

このような対応には *u-a* の対応と *u-ə* の対応がある。

ナイマン方言では、標準音の一連の語 (語頭に *b* がある) の第 1 音節の円唇母音 *u* が *a* で、*u* が *ə* で発音される。これは、後続する音節の非円唇長母音に同化した結果である。この点でナイマン方言は隣接のバーリン方言・ハラチン方言と同様、文語やチャハル方言・オルドス方言など内モンゴルの中部及び西部方言と異なる。ホルチン方言では一部の語において第 1 音節の円唇母音が非円唇化しない。

表 31 : *u-a* と *u-ə* の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠪᠣᠳᠠᠭᠠ buday_a	bʊda:	bada: u(02)0350	ご飯
ᠪᠤᠯᠢᠶᠠ buliya-	bʊla:-	bala:- u(11)3289	奪う
ᠪᠦᠷᠶᠠᠰᠤ buryasu	bʊrga:s	barga:s u(10)2700	柳の枝のような植物
ᠪᠦᠲᠡᠭᠡ bütege-	bʊtə:-	bətə:- u(06)0834	蓋をする
ᠪᠦᠯᠢᠶᠡᠨ büliyen	bʊliən / bʊliön	bələ:n u(08)1422	温い
ᠪᠦᠯᠲᠢᠬᠤ bülteikü	bʊlti:x	bəlti:x —	(目を) 大きくする

表 32 : u-a と u-ə 及び o-ə の対応の隣接方言との比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠮᠣᠨᠳᠣᠷ	möndör	m <u>o</u> ndər	m <u>e</u> ndər	m <u>o</u> ndər	m <u>u</u> ndər	m <u>e</u> ndər	雹
ᠪᠦᠷᠭ᠋᠎ᠠ	buryasu	b <u>u</u> rga:s	b <u>a</u> rga:s	b <u>a</u> rga:s	b <u>a</u> rga:s	b <u>a</u> rga:s	表 31 同
ᠪᠦᠯᠢᠶᠡᠨ	büliyen	b <u>u</u> liə:n	b <u>e</u> lə:n	b <u>e</u> lə:n	b <u>u</u> lə:n/b <u>i</u> lə:n ²³	b <u>e</u> lə:n	温い
ᠪᠦᠯᠢᠶ᠋ᠠ	buliya-	b <u>u</u> liɑ:-	b <u>a</u> la:-	b <u>a</u> la:-	b <u>a</u> la:-	b <u>a</u> la:-	奪う
ᠪᠦᠳᠠᠭ	buday_a	b <u>u</u> da:	b <u>a</u> da:	b <u>a</u> da:	b <u>a</u> da:	b <u>a</u> da:	ご飯

表 33 : o-ə と o:-ə: の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠮᠣᠭᠦ	mögü	m <u>o</u> :g	m <u>e</u> :g u(10)2625	椎茸
ᠮᠣᠨᠳᠣᠷ	möndör	m <u>o</u> ndor	m <u>e</u> ndər u(06)0874	雹

表 32 のように、ナイマン方言では語頭に **b** がある標準音の一部の語の第 1 音節の **u** (第 2 音節に長母音 **a:** がある) が **a** で発音され、**u** (第 2 音節に長母音 **ə:** がある) が **ə** で発音される。バーリン方言・ハラチン方言もナイマン方言と同様で、ホルチン方言では一部の語がナイマン方言と同様である。

表 32 と表 33 のように、ナイマン方言では語頭に **m** がある標準音の一部の語の第 1 音節の **o** と **o:** が非円唇母音化し、それぞれ **ə** と **ə:** で発音される。**o** が非円唇母音化する点でハラチン方言はナイマン方言と同様である。

ナイマン方言では標準音の第 1 音節の二重母音 **ui** が **i:** で発音される例もある。

例: u(11)3005 xi:tn dʒabər (寒い風)

表 34 : ui - i: の対応の各方言との比較の例

文語	標準音	チャハル方言	ナイマン方言	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠬᠦᠶᠡᠨ	küiten	x <u>u</u> itən	x <u>i</u> :təŋ	x <u>i</u> :tn u(11)3005	x <u>y</u> :tən	x <u>y</u> :tn	x <u>y</u> :tən	寒い
ᠬᠦᠶᠢᠰᠦ	küisü	x <u>u</u> is	x <u>u</u> is/x <u>i</u> :s	x <u>i</u> :s —	x <u>y</u> :s	x <u>y</u> :s	x <u>i</u> :s	臍

上の表のように、語頭の **x** に後続する標準音の第 1 音節の二重母音 **ui** が隣接のバーリン方言・ホルチン方言では **y:** で発音され、ナイマン方言では **i:** で発音される。

(b) 非円唇母音から円唇母音への対応

標準音及び隣接のバーリン方言・ホルチン方言の一連の語頭の非円唇母音がナイマン方言では円唇母音で発音される。また、標準音及びホルチン方言に非円唇母音で発音されるものがナイマン方言とバーリン方言では円唇母音で発音される例もある。

表 35²⁴ : 非円唇母音と円唇母音の対応の諸方言との比較

文語	標準音	ナイマン方言 ²⁵	ホルチン方言	バーリン方言	意味	
ሳደሎል	sidam	ʃɪ:dam	ʃɔdɐm	ʃɛdɐm	ʃɛdɐm	棒
ባሃልጅሆር	bayaljuur	bagaɫdʒu:r	bʊgʊɫdʒur	bagɛɫdʒur	bagɛɫdʒu:r	喉
ጥጥርጅ	temege	tɛmɛ:	tomo: / tʊmo:	tɛmɛ:	tomo:	駱駝

(c) 円唇母音同士の対応

① u-ɔ の対応

標準音の一連の語の b に後続する第 1 音節の u がナイマン方言では ɔ~œ で発音される。

表 36 : u-ɔ の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ባህህ	buyu	bʊg u(07)1193	鹿
ባህጅላጅ	burčay	bærtʃæg u(10)2684	豆 ;
ባህጅላጅ	burqan	bɔrxən u(09)2265	仏様
ባህጅ	buyan	bɔjin u(08)1384	福

ナイマン方言・バーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言に共にこの現象がみられるが、ホルチン方言には u のまま発音される場合がある。すなわち、ナイマン方言はこの点で隣接のバーリン方言及びハラチン方言と同様で、ホルチン方言とは一部が同様である。

表 37 : u-o の対応の各方言の比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠪᠦᠭᠦ	buɣu	b <u>u</u> g	b <u>ɔ</u> g	b <u>ɔ</u> g	b <u>ɔ</u> g	b <u>ɔ</u> g	鹿
ᠪᠦᠷᠴᠠᠭ	burčay	b <u>u</u> rtʃag	b <u>æ</u> rtʃæg	b <u>æ</u> rtʃæg	b <u>æ</u> rtʃæg	b <u>æ</u> rtʃæg	豆
ᠪᠦᠷᠬᠠᠨ	burqan	b <u>u</u> rxan	b <u>ɔ</u> rxən	b <u>ɔ</u> rxən	b <u>ɔ</u> rxən	b <u>ɔ</u> rxən	仏様
ᠪᠦᠵᠠᠨ	buyan	b <u>u</u> jin	b <u>ɔ</u> jin	b <u>ɔ</u> jin	b <u>u</u> jan	b <u>ɔ</u> jin	福
ᠪᠦᠴᠠᠯ	bučal-	b <u>u</u> ʃl-	b <u>æ</u> tl-	b <u>æ</u> ʃl-	b <u>u</u> ʃl-	b <u>æ</u> ʃl-	沸騰
ᠪᠦᠴᠠ	buq_a	b <u>u</u> x	b <u>ɔ</u> x	b <u>ɔ</u> x	b <u>u</u> x	b <u>ɔ</u> x	種牛
ᠪᠦᠯᠠᠭ	bulaɣ	b <u>u</u> lag	b <u>ɔ</u> læg	b <u>ɔ</u> læg	b <u>ɔ</u> læg	b <u>ɔ</u> læg	泉

② o-u の対応

標準音の一部の語の第 1 音節の o がナイマン方言では u で発音される。

表 38 : o-u の対応の各方言の比較の例

文語	ナイマン方言	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠬᠣᠯᠤᠰᠤ	kölösö	x <u>u</u> ls u(08)1732	x <u>o</u> ls / x <u>o</u> ləs	x <u>u</u> ls	x <u>o</u> los	汗

なお、チャハル方言にも o-u の対応の現象がみられる (フフバートル 1997 : 13-14)。

o-u の対応の規則性を探ることを今後の課題にしたい。

標準音の第 1 音節の o と u がナイマン方言では o / u 両方で発音される例もある。

表 39 : o-u の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言		意味	
ᠲᠣᠷᠣ	törö	t <u>o</u> r	t <u>o</u> r 39 ²⁶	t <u>u</u> r 25	国家
ᠬᠦᠨᠳᠦ	kündü	x <u>u</u> nd	x <u>o</u> nd / x <u>o</u> ndo: 6	x <u>u</u> nd / x <u>u</u> ndu: 5	重い

標準音の tor と xund はバーリン方言では tor xund で、ホルチン方言では tur xundə: で、ハラチン方言では tor xundu: である。ホルチン方言では o がない、o の代わりに多くの場合 u が用いられる (Sečenbayatur 2005 : 317)。

「アルホルチン旗とバーリン左旗を除くジョーオダ (昭烏達) 方言²⁷には o-u の対応の現象はみられない」(孫竹 1996 : 56)。すなわち、現在のバーリン方言の代表地であるバーリン右旗では o-u の対応の現象はみられないということである。

(2) 長母音と短母音の対応

このような対応には (a) 長母音から短母音への対応と (b) 短母音から長母音への対応の二つあり、それぞれ順に述べる。

(a) 長母音から短母音への対応

標準音の一部の語における長母音がナイマン方言では短母音で発音される。

表 40：長母音から短母音への対応の例

文語	標準音	ナイマン方言 ²⁸	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠪᠠᠷᠠᠭᠤᠨ	barayun	baru:n	barən	barən/baru:n	barən	barən	右
ᠴᠢᠭᠢᠭ	čigig	tʃi:g	tʃig	tʃi:g	ʃi:g	tʃi:g	湿気
ᠶᠠᠶᠠᠬᠢᠵᠤ	yayakiju	ja:ɔɟ	jaxaɔɟ	ja:ɔɟ	jaxaɔɟ	jaxaɔɟ	どのよ うに

バーリン方言では **barən** (1994 年の調査) と発音される場合が圧倒的に多い。ホルチン方言とハラチン方言では **barən** (1993 年の調査) と発音される。また文語の **ᠴᠢᠭᠢᠭ čigig** は隣接のバーリン方言とハラチン方言では **tʃi:g** で、ホルチン方言では **ʃi:g** となっている。文語の **ᠶᠠᠶᠠᠬᠢᠵᠤ yayakiju** の母音はバーリン方言では標準音と同様に長母音になっており、ナイマン方言とハラチン方言では **jaxaɔɟ** となり、長母音化していない。

以上のほかに、文語の **ᠪᠠᠭᠠᠭᠢᠬᠤ bayagiqu** (噴く) **ᠴᠢᠷᠦᠭᠦᠪᠴᠢ quruγubči** (指貫) **ᠠᠶᠤᠯᠢᠬᠠᠢ ayuuliqai** (胸) は標準音では、**ba:gax xuru:ɔɟ aju:lxæ:** のように、長母音で発音されるところは、ナイマン方言で **bagəx xærəɔɟ ajilxa:** のように短母音で発音される。

上の例の文語の **ᠪᠠᠭᠠᠭᠢᠬᠤ bayagiqu** と **ᠴᠢᠷᠦᠭᠦᠪᠴᠢ quruγubči** は **aya>a: ugu>u:** のように「母音 + g(γ) + 母音」の音節が子音の脱落により、標準音及び他の方言では **a: u:** の長母音となっているが、ナイマン方言ではそれぞれ **a u** の短母音となり、さらに第 2 音節以降の短母音の弱化により、**u** が **ə** で発音されるようになったものと解釈できる。また、文語の **ᠠᠶᠤᠯᠢᠬᠠᠢ ayuuliqai** の第 2 音節の二つの同じ母音 **uu** が標準音では長母音で発音されるところは、ナイマン方言では短母音 **i** で発音される。

文語の **ᠴᠣᠶᠠᠭᠤᠯᠠ qoyayula** は標準音では **xɔju:l** のように第 2 音節の母音が長母音であるが、ナイマン方言とホルチン方言では第 2 音節の母音が短母音で発音される。

標準音とナイマン方言で長母音であるが、ホルチン方言では短母音となる例もみられる。

表 41 : 長母音と単母音の対応のナイマン方言とホルチン方言との比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	ホルチン方言	意味	
ᠠᠯᠴᠢᠶᠤᠷ	alčiyur	alʧu:r	elʧu:r u(06)0834	elʃur	タオル
ᠨᠠᠷᠢᠨ	narin	næri:n	nəri:n u(08)1640	nɛrən	細い

長母音と単母音の対応においてモンゴル諸語にもナイマン方言と同じ例がみられる。

表 42 : 長母音と単母音の対応のモンゴル諸語との比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	東部ユグル語	意味	
ᠬᠤᠷᠤᠭᠤᠪᠴᠢ	quruyubči	xuru:btʃ	xærəbtʃ —	xurəbtʃ	指貫
ᠴᠢᠭᠢᠭ	čigig	ʧi:g	ʧig u (09)2445	ʧig	湿気
ᠵᠢᠭᠢᠨ	jegün	dʒu:n	dʒun u(08)1674	dʒuŋ	左

(b) 短母音から長母音への対応

標準音の一部の語の短母音がナイマン方言では長母音で発音される。

表 43 : 短母音と長母音の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠠᠷᠶᠠᠯ	arɣal	argu:l	u(09)2142	乾いた牛糞
ᠶᠣᠶᠣᠳ	ɣoɣod	gu:gu:d	u(10)2690	蕻

竹

孫竹 (1996 : 118) によると、標準音の **argal** (文語の ᠠᠷᠶᠠᠯ arɣal) の第 2 音節の母音がホルチン方言では長母音であるが、バーリン方言とハラチン方言では短母音である。

(3) 男性母音と女性母音の対応

ナイマン方言では文語と標準音の一部の語の男性母音と女性母音の代替がみられる。

表 44 : 男性母音と女性母音の対応の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠲᠡᠢᠷᠬᠤ	teirkü	ti:rəx	tɛ:rəx	家畜が後脚を後ろへ蹴る
ᠰᠠᠯᠠᠭᠢ ᠰᠠᠯᠠᠭᠢ	qui salkin	xuɪ sælxɪn	xui / xy: sælxən	旋風
ᠰᠢᠪᠴᠠᠷᠠᠭᠤ	sibqarqu	ʃabxrax	ʃibxurəx	水が切れる
ᠪᠠᠭᠠ ᠴᠢᠨᠡᠭᠡᠨ	bay_a činegen	bag ʧinə:n	bag.ʧina:n ²⁹	少な(からず)

表 45 : 男性母音と女性母音の対応の各方言の比較の例

文語	標準音	ナイマン方言	ホルチン方言	バーリン方言	意味
ᠨᠢᠰᠦᠭᠡᠳ	nisüged	n̥isə:d	n̥ɛsa:d u(06)1042	n̥isə:d	飛んで
ᠨᠢᠷᠭᠡᠬᠦ	nirgekü	n̥irgəx	n̥ɛrgəx ——	n̥irgəx	雷撃する
ᠳᠢᠭᠭᠢᠨᠭᠡᠨᠬᠦ	jingginékü	ɖʒingənəx	ɖʒɛŋnəx ——	ɖʒɛŋləx	冷える

以上のほかにも標準音の ʃiməx indʒ gindʒ はホルチン方言で ʃeməx ɛndʒ gɛndʒ である (Bayančoytu 2002 : 24)。

(4) 二重母音から短母音への変化

文語と標準音の少数の語中の二重母音がナイマン方言では単母音である。

表 46 : 二重母音から短母音への変化の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠭᠦᠢᠴᠡᠬᠦ	güičekü	guitʃəx	guitʃəx u(08)1688 足りる

文語の少数の語中の二重母音が標準音では長母音であるが、ナイマン方言で脱落する。

表 47 : 文語の語中の二重母音の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠲᠡᠳᠦᠢᠴᠢᠨᠭᠡᠨ	tedüičinegen	todi:ʃinə:n	tədtʃinə:n u(11)2819 そんなに
ᠬᠡᠳᠦᠢᠴᠢᠨᠭᠡᠨ	kedüičinegen	xədi:ʃinə:n	xədtʃinə:n u(08)1708 いくら

1.2 音韻の脱落

子音 r の脱落

ナイマン方言では、文語と標準音の一連の語中の r が脱落する。

表 48 のように、標準音の語中の $\langle r+l \rangle$ と $\langle r+j \rangle$ の構成の場合の r がナイマン方言で脱落している。

表 48 : 語中の r の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠪᠠᠶᠠᠷᠯᠠᠭᠤ	bayarlaqu	bajarlax bajiləx u(11)3298	喜ぶ
ᠴᠡᠭᠡᠷᠯᠡᠬᠦ	čegerlekü	ʧə:rləx ʧə:ləx u(09)2228	戒める
ᠬᠡᠦᠷᠰᠢᠬᠦ	keürsikü	xu:rljix xu:ʃəx ——	焦げる
ᠬᠣᠷᠰᠢᠬᠤ	qorsiqu	xɔrljix ɣɔʃəx ——	共同で
ᠶᠠᠷᠰᠢᠭ	yarsiy	jærʃig jɛʃəɣ ——	やかましい
ᠶᠠᠷᠰᠢ	qarsi	xarʃ ɣaʃ ——	邪魔

また、文語と標準音の一つの語における二つの r の先行する音節の r がナイマン方言では脱落する。

表 49 : 一つの語に二つの r が入った場合の r の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠪᠠᠷᠠᠬᠢᠷᠠᠬᠤ	bar_kiraqu	bær_xrax bɛxrəx / bɛʔɛr- u(01)0213	叫ぶ
ᠰᠠᠷᠠᠬᠢᠷᠠᠬᠤ	šarkiraqu	ʃær_xrax ʃɛxrəx ——	だるくていたい

モンゴル諸語及び他の方言にも r の脱落の例がみられる。

表 50 : モンゴル諸語における r の脱落の例 (1)

文語	標準音	ドゥンシャン語	意味
ᠶᠠᠵᠠᠶᠠᠷ	qajayar	xɑɕɑ:r yada	轡 (くつわ)
ᠶᠣᠷᠠᠬᠠᠢ	qoruqai	xɔrxæ: Gugi	虫
ᠡᠩᠭᠡᠷ	engger	əŋgər əŋgiə	(中国服の) 前身頃
ᠶᠠᠷᠳᠤᠨ	qurdun	xurdan yudun	速い

表 51 : モンゴル諸語における r の脱落の例 (2)

文語	標準音	東部ユグル語	意味
ᠬᠦᠷᠲᠡᠯᠡ	kürtel_e	xurtəl kutele~kurtele	まで
ᠳᠡᠷᠭᠡᠲᠡ	dergete	dərgət degde	隣、傍

隣接のホルチン方言でも文語の ᠪᠠᠶᠠᠷᠯᠠᠭᠤ bayarlaqu (喜ぶ) ᠴᠡᠭᠡᠷᠯᠡᠬᠦ čegerlekü (禁忌する) ᠶᠠᠷᠰᠢᠭᠢᠷᠢᠯᠢᠭ jərliᠭ (野生の) などの子音 r が脱落する (Bayančoytu 2002 : 82)。

子音 l の脱落

ナイマン方言では、文語と標準音の一連の語中の l が脱落する。

表 52 : 語中の l の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠬᠠᠯᠢᠰᠢᠷᠠᠬᠤ	qalasıraqı	xalʃrax	gaʃirəx	飽きる
ᠬᠠᠯᠠᠯᠠᠬᠤ	qalqalaqu	xalxlax	gaxu:ləx	遮る
ᠤᠷᠭᠦᠯᠢᠯᠢᠭᠡᠬᠡ	ürgüljilekü	urgəldəlex	uʔurəldəx	連なる

モンゴル諸語に l があるのに現代モンゴル語には l のない例がある。

表 53 : モンゴル諸語における l の脱落していない例 (1)

文語	標準音	バオアン語	意味	
ᠵᠢᠶᠠᠰᠤ	jıyasu	ɟagas	ɟaga:lsoŋ	魚
ᠮᠣᠰᠤ	mösö	mos	me:lsoŋ	氷

表 54 : モンゴル諸語における l の脱落していない例 (2)

文語	標準音	モンゴル語	意味	
ᠰᠣᠰᠤ	sösö	sos	su:ldz*ə	胆
ᠴᠠᠶᠠᠰᠤ	čayasu	tʃa:s	tʃa:ldz*ə	紙
ᠮᠣᠰᠤ	mösö	mos	mo*lsə	氷

表 55 : モンゴル諸語における l の脱落の例

文語	標準音	ドゥンシャン語	意味	
ᠬᠢᠯᠶᠠᠰᠤ	kilyasu	xılgas	Guu*γasun	馬のたてがみと尻尾の毛
ᠠᠷᠶᠠᠯ	aryal	argal	hanGa	乾いた牛糞

子音 b の脱落

ナイマン方言では、標準音の一部の語中の b が脱落する。

表 56 : 語中の b の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠬᠣᠮᠣᠢᠪᠴᠢ	qormoibči	xɔrmæ:bʧʰ	xærmæ:tʃ	エプロン
ᠤᠮᠪᠠᠭᠤ	umbaqu	umbax	ɔmæx	泳ぐ

子音 **b** の脱落の現象はモンゴル諸語及びモンゴル語の他の方言にもみられる。

表 57 : モンゴル諸語における b の脱落の例

文語	標準音	ダウンシャン語	意味	
ᠨᠠᠪᠴᠢ	nabči	nabʧʰ	latʃəŋ	葉

表 58 : モンゴル語の他の方言における b の脱落の例

文語	標準音	チャハル方言 ³⁰	意味	
ᠡᠪᠴᠢᠭᠢᠭᠤ	ebčigüü	əbʧʰu:	utʃu:	胸
ᠲᠣᠪᠬᠢᠨᠭᠠ	töbkinékü	tobxonox	duxnəx	安置する

また、文語の ᠶ᠎ᠠᠵᠣᠪᠻᠢ jobki をウラーン・ハダ市のオンニョード旗・寧城県・ハラチン旗・バーリン左旗の一部の調査地点では dʒæx ~ dʒɔx ともいう。この場合 **b** が脱落している。

子音 x と g の脱落

ナイマン方言及びその隣接の諸方言では標準音の ŋ に後続する g が脱落する。

表 59 : ŋ に後続する g の各方言の例³¹

文語	標準音	ナイマン方言 ³²	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言	意味	
ᠴᠢᠩᠭᠠ	čingγ_a	ʧaŋg	ʧaŋ	ʧaŋg	ʃaŋ	ʧaŋ	強い
ᠲᠡᠭᠷᠢ	tegri	təŋgər	təŋər	təŋgər	təŋər	təŋər	天
ᠰᠣᠯᠤᠩᠭᠠ	solungγ_a	sɔlɔŋg	sɔləŋ	sɔləŋ	sɔləŋ	sɔləŋ	虹
ᠰᠤᠩᠭᠠᠭᠤᠴᠤ	sungyuqu	suŋgax	suŋəx	suŋgəx	suŋəx	suŋəx	選ぶ
ᠮᠠᠩᠭᠠᠰ	mangγus	maŋgas	maŋəs	maŋgəs/maŋs	maŋəs	manes	悪魔
ᠮᠣᠩᠭᠠᠭᠢ	möŋgü	moŋg	muŋ	moŋg/ moŋ	məŋ	moŋ/moŋg	銀

ŋ に後続する g の脱落は、ホルチン方言 (Sečen 1998:299) とハラチン方言 (Sečen 1998:351) にもみられる。バーリン方言についての記述研究では、この現象についての記述は確認されていない。上の表からみてとれるように、バーリン方言では完全に脱落した

ものは *sɔləŋ* のみで、脱落しない例が多い。チャハル方言では *ŋ* に後続する *g* は脱落しない。

表 60 : *ŋ* に後続する *g* の脱落の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠴᠢᠩᠭᠠ	čingγ_a	ʧaŋg / ʧaŋ u(04)0534	強い
ᠬᠠᠷᠠᠩᠭᠠ	qarangγ_a	xaraŋg / xaraŋ u(08)1895	銅鑼 (どら)
ᠣᠩᠭᠤᠯᠠᠭᠤ	ongyulaqu	ɔŋgɔləx / ɔŋləx u(09)2178 / u(09)2175	供養する

ナイマン方言では、上の条件のほかに、標準音の一部の語中の子音 *x* と *g* が脱落する。

表 61 : 語中の *x* と *g* が脱落する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠴᠠᠳᠠᠭᠤᠯᠠᠩ	čadqulang	ʧatɣalaŋ / ʧadləŋ —	おなかいっぱい
ᠴᠠᠷᠴᠠᠭᠠᠢ	čarčaqai	ʧartʃa:xæ: / ɕertʃɛ: —	蝗
ᠨᠢᠭᠡᠮᠦᠰᠢᠨ	nigemüsün	nəgmoson / nəmsən u(03)0517	完全に
ᠤᠭᠲᠡᠭᠡᠬᠦᠢ	ügtegekü	ugtə:x / utə:x —	抜く
ᠭᠦᠷᠡᠯᠳᠦᠭᠡᠨ	gürelʒegen_e	gureldʒəŋ / gurə:ldʒəŋ —	コオロギ

また、文語の *ᠭᠠᠭᠲᠠᠷ* *γaγčayar* は標準音では *gantʃa:r / gagʃa:r* で、ナイマンでは *gantʃa:r / gatʃa:r* と発音され、*gatʃa:r* の場合は語中の *g* が脱落している。

例 1 : u(11)2734 *gantʃa:r-a:ŋ(n) gara:d jəbɕʒ*. (一人で出て行った。)

例 2 : u(11)2813 <ənd ʧi: *gatʃa:r-a:n bəlxuɛ*, *ɛm-a:ŋ(n) gə:n*ə:* > *gəɕʒ*. (「ここにあなたが一人でいてはいけない」と言った。)

ナイマン方言では標準音の語末の *g* が脱落する例もみられる。

表 62 : 語末の *g* が脱落する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠶᠢᠷᠮᠡᠭ	irmeg	irməg ³³ / irəm	縁

音韻の脱落の現象は他の方言及びモンゴル諸語にもみられる。例えば、文語の *ᠶᠢᠷᠮᠡᠭ* *irmeg* をナイマン方言のほかに、バーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言の一部の調査地点で *irəm* ともいう。また、文語の *ᠨᠢᠳᠤᠷᠠᠭ* *nidury_a* (拳) は標準音では *nudrag* であるが、ハ

ラチン方言では *nudər* というところがある (1994 年の調査)。文語の *ᠪᠣᠮᠪᠦᠭᠡ* *bömböge* (ボール) は標準音では *bombog* であり、ウラーン・ハダ市の寧城県の多くの調査地点では *bombo:* / *bumbu:* という (1994 年の調査資料)。

以上のほかに、ナイマン方言では標準音の語頭の *n* が脱落する例もみられる。

表 63 : 語頭の *n* が脱落する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
<i>ᠨᠢᠮᠭᠡᠨ</i>	<i>nimgen</i>	<i>iŋen</i> <i>u(09)2151</i>	薄い

モンゴル語方言には語頭の *x* が脱落する例もある。例えば、1994 年の調査資料によるとウラーン・ハダ市のハラチン旗や寧城県などのハラチン方言では標準音の *xutag* を *uʰtəg* ~ *utəg* という。また、ヘシグテン旗の多くの調査地とバーリン左旗の一部の調査地でも標準音の *xutag* の語頭の *x* が脱落する現象がみられる。

この他、ナイマン方言では語中の *x* がほとんどの場合に摩擦が曖昧化し、閉鎖音で発音される。これを「?」で記すことができよう。

表 64 : 語中の *x* の摩擦が曖昧化し、閉鎖音で発音される例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
<i>ᠭᠠᠻᠠᠢ</i>	<i>ɣaxai</i>	<i>gax̣ai:</i> <i>u(09)2121</i>	豚
<i>ᠨᠣᠻᠠᠢ</i>	<i>noχai</i>	<i>noʔai:</i> <i>u(11)3275</i>	犬
<i>ᠲᠣᠻᠠᠢ</i>	<i>doχai</i>	<i>doʔai:</i> ——	肘
<i>ᠬᠠᠻᠠᠬᠤ</i>	<i>xaxax</i>	<i>gax̣ax</i> ——	咽ぶ

x の摩擦が曖昧化することについて、Nulmajab(1986)では、「子音 *x* の摩擦の曖昧化と脱落の現象は、ハラチン・トメド方言だけの現象ではなく、ホルチン方言にもみられる。それはある程度の普遍性をもっている」と述べた。そのため、*x* の摩擦の曖昧化はナイマン方言及びその隣接のホルチン方言とハラチン方言にも共通している現象と言える。

1.3 音節の脱落

(1) 第 1 音節の脱落

文語と標準音の少数の語の音節がナイマン方言では脱落する。

表 65 : 音節が脱落する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
ᠦᠮᠡᠬᠡᠢ	ümekei	umxi: miʔi: / məxi: u(10)2652	臭い
ᠲᠣᠲᠤᠮ	totum	tutam tən u(08)1797	(すればする) ほど

ᠦᠮᠡᠬᠡᠢ の第 1 音節の脱落はバーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言の各方言にもみられる。

ᠲᠣᠲᠤᠮ totum はホルチンでは səm-a:n³⁴となり、第 1 音節が脱落する。

(2) 二つの語からなる語

ナイマン方言では音韻の省略により、標準音の二つの語が一つの語になる例もある。例えば、文語の ᠲᠡᠷ ᠣᠳᠣᠷ tere edür は標準音では ər̩t odor で、ナイマン方言では ər̩tə:r (先日) と発音される。

tər odor も ər̩t odor も 3 音節 (1 音節 + 2 音節) であるが、todər / todor と ər̩tə:r は 2 音節語である。

表 66 : 二つの語から一つの語になる例

文語	標準音	ナイマン方言	チャハル方言 ³⁵
ᠲᠡᠷ ᠣᠳᠣᠷ ³⁶	tere edür	tər odor todər / todor u(08)1506	toldor ³⁷

以上のように、ナイマン方言では隣接の方言と異なり、チャハル方言・ウジュムチン方言と近い現象がみられる。

また、ナイマン方言では、文語の ᠡᠷ ᠡᠮ ᠡ er_e em_e (夫婦) に xəjil (二人で) が後続する場合は ər̩əm と発音され、それ以外の場合は標準音と同様に ər̩ əm と発音される。

例 1 : u(08)1697 ər̩əm xəjil-ɔ:n nəg xu:-tə:-ga:n gurbu:l-a:n ɟʊl ɟərgəltə: sə:ʔən əmdər̩l-d ɔrtʃʃ*ɛ: . (夫婦二人が自分の一人の息子と幸せな人生を始めた。)

例 2 : u(11)2958 <əŋə:d tɛdn xəɟə:d-ə:n mətʃgə:d ər̩ əm bələ:d su:tʃg*ə: > gəɟ . (「そして、あなたたちが夫婦になってください」と言った。)

以上のような音韻の脱落の例から、ナイマン方言では音韻の省略の傾向があることがわかる。ナイマン方言では標準音及び文語と比べて、音韻の添加もみられるが、音韻の省略が主となっている。子音の脱落、音節の脱落、長母音を短母音でいう、二重母音を短母音でいう、二つの語から一つの語になるのは全て音韻省略の現象である。

しかし、文語と標準音では母音の間の子音が脱落して、長母音が発生したのに、ナイマン方言では子音の脱落と長母音が発生しない例がある。

表 67 : 母音の間の子音が脱落せず、長母音が発生していない例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
յիգյւր	jigür	ɟu:r	ɟibər — 翼
յայակիյու	yayakiju	ja:ɟ	jaxaɟ u(01)0292 どういうふうに
ադյոյս	aduyusu	adu:s	adgus — 畜生
սյւր	uyur	u:r	ugur — 白

1.4 音韻の添加

子音 n の添加

ナイマン方言では、語頭に n が添加する例がある。また、標準音と文語に n がいない少数の語末にナイマン方言で n が観察される。

表 68 : 語頭に n が添加する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
եյմյւ	eimü	ni:m	u(06)0945、u(09)1980 このような

ナイマン方言では、ni:m と同じ意味の ni:mə:ldi: も多く使われる。

表 69 : 語末に n が添加する例

文語	標準音	ナイマン方言	チャハル方言	意味
գւրճ	qurča	xurɟ	gurtʃa: / gurtʃin — gurtʃiŋ	鋭い
տեցի	tegsi	təɟʃ	dəɟʃ / dəɟʃin — dəɟʃiŋ	平ら
օնդո	ondoo	ɔndɔ:	ɔndɔ:n u(02)0354 ɔndɔ:ŋ	別の

上の表の中の例はチャハル方言 (Sečenbayatur 1993) とナイマン方言で語末に子音が増加する点で近似している。

子音 g の添加

ナイマン方言では、語中に子音 g が添加する例がある。例えば、1993 年の調査では、表 70 のように標準音の muʃə:x はナイマン方言の年配層には məɟʃə:x という形で 5 地点に確認された。

表 70 : 語中に g が添加する例

文語	標準音	ナイマン方言	意味
մսիյեկ	müsiyekü	muʃə:x	məɟʃə:x 微笑む

これは、あくまでも文語及び標準音との対応からみるとナイマン方言の年配層で **g** が添加している形になっている。

語中に **g** が添加する例は他の方言にもみられる。例えば、文語の ᠪᠦᠲᠦᠨ *bütün* (全体) ᠬᠣᠶᠣᠰᠤᠨ *qoyosun* (空の)は標準音では *butən xɔ:son* であるが、ホルチン方言では *butgən xɔ:sgən* である。以上は語中に **g** が添加している例である。

ナイマン方言で語末に子音 **g** が添加する例もある。

表 71 : 語末に **g** が添加する例

文語		標準音	ナイマン方言	意味
ᠨᠤᠷᠮ	nurm_a	nuram	nɔrmæg	ほとぼり
ᠡᠳ ᠲᠠᠠᠰ	ed tawar	əd tawar	əd tabræg	物

文語と標準音では語末に **g** がなく、他の方言及びモンゴル諸語には語末に **g** がある例が若干みられる。例えば、文語の ᠡᠭᠦᠷ *egür* (巢)は標準音では *u:r* であるが、ホルチン方言では *u:ræg* である。

この他、文語の ᠰᠠᠭᠰᠤ *saysu* (籠) (標準音及び他の方言では *sags*) はハラチン方言の多くの調査地点では *sagsæg* と発音される。 ᠵᠢᠭᠦᠷ *jigür* (翼) はハラチン方言及び現在の通遼市の開魯県の調査地点では *djibræg* と発音されるところがある(1993年と1994年の調査)。1993年と1994年の調査では ᠰᠣᠷᠡᠮᠰᠡᠭ *sormuusu* (睫)の語末に **g** が添加し、*søræmsæg* ~ *særæmsæg* と発音される地点があった。 ᠰᠣᠷᠡᠮᠰᠡᠭ *sormuusu* の語末に **g** が添加する調査地点を調査資料(1993年と1994年の調査)からみると次のようである。

表 72 : 各方言における ᠰᠣᠷᠡᠮᠰᠡᠭ *sormuusu* の語末に **g** が添加される地点

調査の場所	ホルチン 左翼後旗	ホルチン 左翼中旗	ナイマン 旗	バーリン 右旗	バーリン 左旗	寧城 県
ᠰᠣᠷᠡᠮᠰᠡᠭ <i>sormuusu</i>	5	2	1	9	6	1

次は文語と標準音には語末に **g** がなく、モンゴル諸語には語末に **g** がある例である。

表 73 : モンゴル諸語における語末に **g** がある例(その1)

文語	標準音	バオアン語	意味	
ᠲᠡᠭᠷᠢ	tegri	tənggər	tənggəræg	天

表 74 : モンゴル諸語における語末に g がある例 (その 2)

文語	標準音	東部ユグル語	意味	
ᠨᠠᠪᠴᠢ	nabči	nabɕj	labɕaḡ	葉

表 75 : モンゴル諸語における語末に g がある例 (その 3)

文語	標準音	モンゴル語	意味	
ᠬᠢᠷᠵᠡ	kürje	xurdɕ	gurdɕaḡ	シャベル

ナイマン方言では、語頭に x が添加されている例もある。例えば、文語の ᠤᠳᠦᠬᠤᠰᠤ udququ (掬う) は標準音では **utgax** で、ナイマン方言では **gutgəx** である。

1.5 音韻の転換

ナイマン方言では標準音と比較して少数の語に音韻の転換がみられる。

表 76 : 音韻の転換の例

文語	標準音	ナイマン方言	意味	
ᠭᠤᠯᠢᠷ	γulir	gulir	gurəl u(02)0353	面
ᠵᠠᠶᠠᠲᠤᠨᠠᠬᠤ	ḡayātunaqu	ɕagɕnax	ɕəɕtənəx —	痒い
ᠤᠷᠭᠦᠯᠵᠢᠯᠡᠭᠡᠳ	ürgüljileged	urgəɕɕlə:d	u?urəɕɕə:d —	連なって
ᠠᠯᠠᠳᠠᠶ	alayday_a	aɭagda:	alda:g —	跳び兔

文語の ᠤᠷᠭᠦᠯᠵᠢᠯᠡᠭᠡᠳ ürgüljileged は標準音では **urgəɕɕlə:d** であり、ナイマン方言では **u?urəɕɕə:d** と発音される。ここでは標準音の第 2 音節の **g** がナイマン方言では ? となっており、さらに ? が **r** と転換している。

文語の ᠢᠷᠮᠡᠭ irmeg (縁) は標準音では **irməḡ** であり、ナイマン方言の多くの地域では標準音と同様に **irməḡ** と発音されるが、一部の地域では **irəm** または **imrəḡ** と発音される。

まとめ

ナイマン方言とチャハル方言及び隣接の諸方言との音韻の比較

1. ナイマン方言とチャハル方言の音韻の比較

共通点：

- ① 語頭子音 x t $tʃ$ がその後の子音の影響で g d $dʒ$ と有声化する (1.1.1)。
- ② 限界の副動詞語尾は標準音では $-tal_4$ 、チャハル方言では $-tar_4$ で、ナイマン方言では $-tər$ で、 l が r で発音される点で、チャハル方言とナイマン方言は同様である (1.1.2.1)。
- ③ 標準音の一連の語頭の $ʃ$ が j で発音される (1.1.2.1)。

相違点：

- ① ナイマン方言では文語と標準音の一連の語頭 n が l で発音される (1.1.2.1)。
- ② ナイマン方言では標準音の一部の語頭の x (文語の i の前の k) が $ʃ$ で発音される (1.1.2.1)。
- ③ ナイマン方言では標準音と文語の一部の語 (語頭に b がある) の第1音節の円唇母音 u が a で、 u (語頭に b 、 m がある) が $ə$ で発音される (1.1.2.2)。
- ④ 標準音の一連の語 (語頭に b がある) の第1音節の u がナイマン方言では $ɔ \sim \text{œ}$ で発音される (1.1.2.2)。
- ⑤ チャハル方言では語末の n が $ŋ$ で発音されるが、ナイマン方言では少数の語を除くと n のままである (1.1.2.1)。
- ⑥ 標準音の $ŋ$ に後続する x/g はナイマン方言では脱落するが、チャハル方言では脱落しない。 $ŋ$ に後続する x がチャハル方言では k で発音される (1.2)。
- ⑦ ナイマン方言では標準音の語頭に m がある一部の語の第1音節の円唇母音 o が $ə$ で $o:$ が $ə:$ で発音される (1.1.2.2)。
- ⑧ 標準音の一部の語における長母音がナイマン方言では短母音で発音される (1.1.2.2)。

2. ナイマン方言と隣接諸方言 (隣接のホルチン方言・ハラチン方言・バーリン方言) との音韻の比較：

(1) ナイマン方言とバーリン方言の音韻の比較

共通点：

- ① 標準音の b に後続する一連の語の第1音節の u がナイマン方言とバーリン方言では $ɔ \sim \text{œ}$ で発音される (1.1.2.2)。
- ② 文語と標準音の一連の語頭の n が l で発音される (1.1.2.1)。
- ③ 標準音の一連の語 (語頭に b がある) の第1音節の円唇母音 u が a で、 u が $ə$ で発

音される (1.1.2.2)。

相違点：

- ① ナイマン方言では語頭の **x t ʃ** がその後の子音の影響で **g d ɟ** となる (1.1.1)。
- ② 限界の副動詞語尾は標準音では **-tal₄** で、ナイマン方言では **-tər** のように **l** が **r** で発音される (1.1.2.1)。
- ③ ナイマン方言では標準音の一部の語頭の **x** (文語の **i** の前の **k**) が **ʃ** で発音される (1.1.2.1)。
- ④ ナイマン方言では文語の一部の語頭の **ʃ** が **j** で発音される (1.1.2.1)。
ナイマン方言には上記の特徴があるが、バーリン方言にはない。
- ⑤ 標準音の **ŋ** に後続する **x / g** がバーリン方言では脱落しない場合が多いが、ナイマン方言では脱落する (1.2)。
- ⑥ ナイマン方言では標準音の語頭に **m** がある一部の語の第 1 音節の円唇母音 **o** が **ə** で、**o:** が **ə:** で発音されるが、バーリン方言では非円唇母音化しない (1.1.2.2)。
- ⑦ 標準音及びバーリン方言の一部の語における長母音がナイマン方言では短母音で発音される (1.1.2.2)。

(2) ナイマン方言とホルチン方言の音韻の比較

共通点：

- ① 文語と標準音の一部の女性語がナイマン方言とホルチン方言では男性語となる (1.1.2.2)。
- ② 標準音の **ŋ** に後続する **x / g** がナイマン方言とホルチン方言で脱落する (1.2)。
- ③ 文語と標準音の一連の語頭の **n** が **l** で発音される。

相違点：

- ① ナイマン方言では語頭の **x t ʃ** がその後の子音の影響で **g d ɟ** となる (1.1.1)。
- ② 限界の副動詞語尾は標準音では **-tal₄** で、ナイマン方言では **-tər** のように **l** が **r** で発音される (1.1.2.1)。
- ③ 標準音の一部の語頭の **ʃ** がナイマン方言では **j** で発音される (1.1.2.1)。
ナイマン方言に上記の特徴があるが、ホルチン方言にはこれらの特徴はみられない。
- ④ ホルチン方言では標準音の **ʃ** が全て **ʃ** で発音される。
- ⑤ ホルチン方言では **o** がない、**o** の代わりに多くの場合 **u** が用いられ (Sečenbayatur 2005 : 317)。
- ⑥ ホルチン方言では **o:** がない。(標準音の) **o:** が多くの場合 **ə:** で発音れる。一部の地域では **o:** が **uə ~ uə:** で発音れる。(Sečenbayatur 2005 : 322)。
- ⑦ ホルチン方言では標準音の **ŋ** に後続する **n** が **l** で発音される (1.1.2.1)。
- ⑧ ホルチン方言では長母音が短母音で発音される例が比較的が多い (1.1.2.2)。

- ⑨ ホルチン方言の一部の地域ではに文語の非第1音節の *i* の前の *n* が *j* で発音される (Bayančoγtu 2007 : 405)。
- ⑩ ホルチン方言の一部の地域では *s* を *t* で発音する (Bayančoγtu 2007 : 406)。

(3) ナイマン方言とハラチン方言の音韻の比較

共通点：

- ① 標準音の一部の語頭の *x* (文語の第1音節の *i* の前の *k*) が *j* で発音される (1.1.2.1)。
- ② 標準音の一連の語の第1音節の *u* (*b* に後続する) が *ɔ*~*œ* で発音される (1.1.2.2)。
- ③ 文語と標準音の一連の語頭の *n* が *l* で発音される (1.1.2.2)。
- ④ 標準音の *ŋ* に後続する *x* / *g* がナイマン方言では脱落するが、ハラチン方言でも脱落する例が多い (1.2)。
- ⑤ 第1音節の *u* に異音 *u^h*~*u^a* がある (Mönggüngerel 1998: 8; Sečen, W. 2000: 185~186; ; Sečen1998 : 351~352) (1.2)。
- ⑥ 標準音の一連の語 (語頭に *b* がある) の第1音節の円唇母音 *u* が *a* で、*u* が *ə* で発音される。(1.1.2.2)。

相違点：

- ① ナイマン方言では語頭の *x* *t* *tʃ* がその後の子音の影響で *g* *d* *dʒ* と異化する (1.1.1)。
- ② 限界の副動詞語尾は標準音では *-tal₄* で、ナイマン方言では *-tər* のように *l* が *r* で発音される (1.1.2.1)。
- ③ ナイマン方言では文語の一連の語頭の *ʃ* が *j* で発音される (1.1.2.1)。
ナイマン方言に上記の特徴があるが、ハラチン方言にはない。
- ④ ハラチン方言には男性母音 *i* とその長母音 *i:* がある (Sečēnbayatuγ 2005 : 355~356) (曹道巴特尔 2007 : 48) が、ナイマン方言にはない。
- ⑤ 標準音と他の方言の *u:* がハラチン方言では *ɔ:* で発音される場合がある (曹道巴特尔 : 94~95 ; Sečēnbayatuγ 2005 : 355~356)

以上のほかに、ナイマン方言では第1音節の *u* に *u^ε* / *u^o* という異音がある点で他の方言と異なる。また、標準音の第1音節の *o* と *u* がナイマン方言では *o* / *u* 両方で発音される例もある。更に、ナイマン方言では標準音及び隣接方言の一連の語頭の非円唇母音が円唇母音で発音されるなど他の方言と異なる点がある。

表 77: ナイマン方言とチャハル方言・バーリン方言・ホルチン方言・ハラチン方言との音韻の比較

特徴	方言	チャハル方言	ナイマン方言	バーリン方言	ホルチン方言	ハラチン方言
語頭の x t ʃ が g d ɟ と異化する。		有	有	--- ^{38[41]}	---	---
文語の副動词语尾-tal ₂ の l が r で発音される。		有	有	---	---	---
第1音節の u に異音 u ^ε / u ^ɔ がある。		---	有	---	---	---
第1音節の u に異音 u ^h ~ u ^a がある。		---	有	---	---	有
標準音の一部の語頭の ʃ が j で発音される。		有	有	---	---	---
標準音の一部の語頭の x (文語の第1音節の i の前の k) が ʃ で発音される		---	有	---	---	有
標準音の一部の語頭の n が l で発音される。		---	有	有	有	有
男性母音 ɪ と i: がある。		有	---	---	---	有
標準音と他の方言の u: が ɔ: で発音される場合がある。		---	---	---	---	有
標準音の ŋ に後続する x / g が脱落する。		---	有	---	有	有
標準音の ŋ に後続する n が l で発音される。		---	---	---	有	---
標準音の ʃ の代わりに ʒ が発音される。		---	---	---	有	---
標準音の o が u で、o: が ə: または uə ~ uə: で発音される。		---	---	---	有	---
共通項目数		7	13	6	4	7

参考文献

[モンゴル語の文献]

- Bayančoytu (2002) : *Qorčin aman ayalyun-u sudulul* (ホルチン方言の研究)、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (内蒙古大学出版社)
- Bayarmendü (1997) : *Bayarin aman ayalyun-u sudulul* (バーリン方言の研究)、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (内蒙古大学出版社)
- Bolu (1984) : “Naiman qusiγun-u nutuy-un ayalyu-yin abiyan-u qubiral-un tuqai angqan-u ajiylalta (ナイマン旗地方方言における音韻変化に関する第一報)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un baysi-yin yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古師範大学学报)
- Čenggeltei (1979) : “Domdadu ulus-un mongyol kelen-ü ayalyu nuγud-i qobiyarilaqu tuqai sanal (中国内のモンゴル語の方言区画に関する意見)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古大学学报)
- (1985) : “Mongyol-un sudulul-du γajar-un jiruy-un ary_a-yi kereglekü tuqai (モンゴル研究に地図の方法を用いることについて)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古大学学报)
- Caiyun, Si. (1995) : “Naiman aman ayalyun-u abiyalaburi-yin sistEm-ün ončaliy (ナイマン方言の音韻体系の特徴)”、Kököqota : *MongGol kele bicig* (蒙古語)
- Jouo Hakutarou (城生佰太郎)・(Ü).Mönggüngerel (2004) : “Naiman aman ayalyun-u egesig-ün Ĵadalulta — dayun-u uqayn-u Ĵadalulta-bar γool bolγaysan — (ナイマン方言における母音の分析 — 音響音声学的解析を中心に—)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un baysi-yin yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古師範大学学报)
- Kükebars・Čimeg (1997) : *Üjümüčin aman ayalyu* (ウジュムチン方言)、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (内蒙古大学出版社)
- Mömö, S.・Yu. Amuyulang (1990) : *Orčin üy_e-yin Mongyol kele ayalyu* (現代モンゴル語とその方言)、Kököqota : *Öbör mongyol-un suryan kümüĴil-ün keblel-ün qoriy_a* (内蒙古教育出版社)、キリル文字よりモンゴル縦文字へ転写したもの
- Mongyol kitad toli* (1999) : *Mongyol kitad toli* (蒙汉语典<蒙漢辞典>)、*Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin Mongyol kele bičig sodolhu tasuy*、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (内蒙古大学蒙古語研究所編、内蒙古大学出版社、増訂版)
- Mönggüngerel, (Ü). (1996) : “Naiman aman ayalyun-u abiyan-u qobiral (ナイマン方言の音韻変化)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un neigem-ün sinjilekü uqayan* (内蒙古社会科学)
- (1998) : *Naiman aman ayalyu* (ナイマン方言)、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (内蒙古大学出版社)
- (2013) : “Öbör mongyol-un Ĵegün oron-u mongyol kelen-ü aman ayalyu nuγud-un töröl sadun-u dayudaly_a-yin tuqai — naiman aman ayalyu-bar γool bolγaba (内モンゴル東部地域のモンゴル語諸方言における新属語彙について—ナイマン方言を中心に—)”、

- Kököqota : *mongyol kele bičig* (蒙古語文)
 ————— (2013) : “Nasun-u jüriy_e-tai qolbuɣdaysan naiman aman ayalɣun-u abiyān-u qubiral-i sinjilekü-ni (年代層別の差異に関連するナイマン方言の音韻変化について)”、
 Kököqota : *mongyol kele bičig* (中国蒙古学)
- Norjin, S. (2001) : *Barimjij_a abiy_a čaqar aman ayalɣu* (標準音チャハル方言)、Kököqota : *Öbör mongyol* (内蒙古人民出版社)
- Nulmajab (1986) : “Qaračın tümed aman ayalɣun-u [x] geigülügči-yin tuqai (ハラチン・トメド方言の子音 x について)”、Kököqota : *Mongyol kele udq_a jokiyal* (蒙古語言文学)
- Öljeitoɣtuqu (1991) : “Naiman aman ayalɣun-u kedün geigülügči abiyān-u ondoosiqu asaɣudal-du (ナイマン方言のいくつかの子音の異化する問題について)”、Kököqota : *Mongyol kele udq_a jokiyal* (蒙古語言文学)
- Sangdügüreng · Čegen (1989) : “Naiman aman ayalɣun-u abiyān-u sistEm (ナイマン方言の音韻体系)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke surɣayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古大学学报)
- Sečen (1995) : “Naiman qusiɣun-u yariyan-u kele-yi dürimjigülkü-dü qolboydaqu abiyān-u (ナイマン旗地方方言の標準音化に関連する音韻の問題)”、Tüngliyoo : *Öbör mongyol-un ündüsüten-ü baysi-yin degedü surɣayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古民族師範学院学报)
- Sečen, W. (2000) : “Baɣarin aru qorčın naiman-u abiyān-u qaričayulul (バーリン・アルホルチン・ナイマンの音韻の比較)”、Kököqota : *Mongyol kele udq_a jokiyal* (蒙古語言文学)
- Sečen, Či. · M.Baɣatur · Sengge (2002) : *Ordus aman ayalɣun-u sudulul* (オルドス方言の研究)、Kököqota : *Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy_a* (内蒙古人民出版社)
- Sečen (1998) : Sečen 主<編> *Mongyol kelen-ü nutuɣ-un ayalɣun-u sinjilel* (モンゴル語方言学)、Begejing : *Tüb-ün ündüsüten-ü yeke surɣayuli-yin keblel-ün qoriy_a* (中央民族大学出版社)
- Sečēnbaɣatur (2005) : Sečēnbaɣatur 主<編> *Mongyol kelen-ü nutuɣ-un ayalɣun-u sinjilel-ün uduridqal* (モンゴル語方言学概論)、Kököqota : *Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy_a* (内蒙古人民出版社)
- Sečēnbaɣatur (1993) : “Čaqar aman ayalɣun-u jarim öbermiče ončaliɣtai üges (チャハル方言の特殊語彙)”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke surɣayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* (内蒙古大学学报)
- Sudulqu tasuɣ (1964) : *Öbör mongyol-un yeke surɣayuli-yin Mongyol kele bičig sodolhu tasu* (内蒙古大学蒙古語研究室<編> *odo üy_e-yin mongyol kele* (現代モンゴル語) ”、Kököqota : *Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy_a* (内蒙古人民出版社)
- Tian siyoo (2004) : “Vlus-un dotuɣadu-deki mongyol kelen-ü nutuɣ-un ayalɣun-u sudulɣan-u toimu baidal (中国内のモンゴル語方言研究の概況)”、Kököqota : *Mongyol kele udq_a jokiyal* (蒙古語言文学)
- Türgen, B. (1978) : “Vlus-un dotuɣadu-yin mongyol kelen-ü nutuɣ-un ayalɣu-yi qobiyarilaqu

ba sayuri ayalıu bolun barimjij_a abiyun-u tuqai asayudal (中国内のモンゴル語の方言区画及び基礎方言と標準音に関する問題) ”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl* (内蒙古大学学報)

Vuda (1982) : “Čaqar aman ayalıun-u abiyalaburi-yin sistEm-ün ončaliy (チャハル方言の音韻体系の特徴) ”、Kököqota : *Öbör mongyol-un yeke surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl* (内蒙古大学学報)

[日本語の文献]

フフバートル (1997) : フフバートル著・小沢重男監修『モンゴル語基礎文法』、インターブックス、東京

ムングンゲレル, ウ. (2001) : 「モンゴル語ナイマン方言の口語資料」、『モンゴルの草原に関する国際学術研究』、東北大学東北アジア研究センター、仙台

[漢語の文献]

曹道巴特爾 (2007) : 『喀喇沁蒙古語研究 (ハラチンモンゴル語の研究) 』、北京、民族出版社

奈曼旗誌 (2002) : 奈曼旗誌編集委員会<編>『奈曼旗志 (ナイマン旗誌) 』、北京、方志出版社

孫竹 (1990) : 孫竹主<編>『蒙古語族語言詞典 (モンゴル諸語辭典) 』、西寧：青海人民出版社

¹ 地名等における () 内は中国での漢語による表記で、以下同様である。

² 本稿ではチャハル下位方言・ナイマン下位方言・バーリン下位方言・ホルチン下位方言・ハラチン下位方言・オルドス下位方言などを全て方言と呼ぶ。

³ 本稿の標準音とは中国領内のモンゴル語標準音を指す。

⁴ () 内は筆者による。

⁵ 同じ調査が 1992 年の夏、内蒙古自治区の興安盟で行われた。

⁶ 「豊かな草原」という意味である。

⁷ 直訳すると「小さな困難」という意味である。“バガ・ベルヘ”の“ベルヘ”とはモンゴル語で「困難」という意味だが、この地域は砂漠や丘などがあるため交通が不便で、徒歩でも車でも人の往来が困難であることがその由来と思われる。

⁸ データベース化した 3339 の文のうち、一部、二つの文を一つにまとめた箇所もあるため、文の通し番号だけが残ってしまったものを含めると 3339 文であるが、実際には 3333 文である。

⁹ これを「本稿の基礎資料」と呼ぶ。

¹⁰ 本稿の中で明示しない資料はこの調査の資料である。

¹¹ 以下では 1993 年の調査資料・1994 年の調査資料と呼ぶ。この資料は未公開である。

- ¹² 引用部分の漢語の原文からの和訳は筆者による。
- ¹³ 本稿のモンゴル文語のローマ字転写と標準音の国際音声記号 (IPA) による表記は全て *mongyol kitad toli* (1999) による。なお、本稿で原典の文語のローマ字転写 *x* を *k* で、*χ* を *q* で表記した。
- ¹⁴ 本稿では、標準音とは中国領内のモンゴル語標準音を指す。
- ¹⁵ 表の中のナイマン方言の項目の数字は本稿の基礎資料である筆者による現地調査資料のデータベースの文のコード番号である。数字が付いていない例はデータベースにない語で、他の調査によるものである。
- ¹⁶ 本稿の基礎資料がなく、コード番号を付けられないため、—— を付けたが、他の調査で確認できたものである。
- ¹⁷ 筆者が参加した 1993 年と 1994 年の方言地図作成のための調査の資料である。
- ¹⁸ 各方言の話される地域 (旗) 名の下に欄に表示した数字は調査で現れた地点の数である。
- ¹⁹ ナイマン方言の 2003 年の調査は 20 地点で行われた。
- ²⁰ 1993 年の方言地図作成のための調査資料によるとナイマン方言では *dʒuxa:r* というところもある。
- ²¹ 本稿では右下の数字は母音調和による異形態を示す。すなわち、 $\mathbf{a}_4$ は $\mathbf{a}/\mathbf{\theta}/\mathbf{o}/\mathbf{o}$ を、 $\mathbf{a}_3$ は $\mathbf{a}/\mathbf{\theta}/\mathbf{o}$ を、 $\mathbf{a}_2$ は $\mathbf{a}/\mathbf{\theta}$ を、 $\mathbf{u}_2$ は $\mathbf{u}/\mathbf{u}$ を示す。文語では $\mathbf{a}_2$ は $\mathbf{a}/\mathbf{e}$ を、 $\mathbf{u}_2$ は $\mathbf{u}/\mathbf{ü}$ を示す。
- ²² 現在の家屋より簡単なつくりの家で、ゲルから定住家屋に変わる過渡的な段階の家屋である。
- ²³ 1993 年の調査による。
- ²⁴ 表 35 のホルチン方言とバーリン方言の例は 1993 年と 1994 年の調査資料によるものである。
- ²⁵ *ʃɔdɛm u(11)2792*, *bʊgʊldʒʊr u(08)1845*, *tomo: /tumo: u(10)2664 /u(01)0114*
- ²⁶ この表の中の例の後ろの数字は本稿の基礎資料に現れた頻度を示す。
- ²⁷ バーリン右旗の口語で代表される。本稿で扱うバーリン方言のことである。
- ²⁸ *barɛn u(09)2163*, *ʧiɣ u(09)2445*, *ʒaxaɖʒ u(09)2102*, *xɔʒil u(11)2846*, *ʃud u(03)0499*
- ²⁹ *bag.ʧina:n* はナイマン方言の独特な表現である。文末に疑問助辞 *i:* が用いられ、「少なからず」という意味を表す。
- ³⁰ チャハル方言の例は Vuda (1982) による。
- ³¹ ホルチン方言の *məŋ* とバーリン方言の *suŋgəx* は 1993 年と 1994 年の調査資料による。
- ³² 本稿の基礎資料に *ʧaŋu(04)0540*, *təŋɛr u(01)0294*, *suŋəx u(03)0481*, *muŋ u(01)0204* が現れた。
- ³³ 一部のところでは *imrəg* とも発音される。
- ³⁴ *-a:n* は再帰所属語尾である。
- ³⁵ ウジュムチン方言では *togdor* である。
- ³⁶ 先日という意味である。
- ³⁷ チャハル方言の例はインフォーマントのスチンバートル氏 (チャハル出身のネイティブ) によるもので、ウジュムチン方言の例は Kükəbars・Čimeg (1997: 41) によるものである。